

なにわ・大阪文化遺産学叢書4

道明寺天満宮宝物選



なにわ・大阪文化遺産学叢書4

道明寺天満宮宝物選

題字は道明寺天満宮南坊城充興宮司による



道明寺天満宮



道明寺天満宮 春の景

ごあいさつ

大阪府藤井寺市道明寺に鎮座する道明寺天満宮は、学問の神様として知られている菅原道真公を祭神とする古社だけに、多くの人びとから尊崇されてきました。境内には、八十種八百本もの梅の樹があり、梅の名所としても広く親しまれています。また、毎年五月には、蔬菜などを供えて孔子および先聖先師を祀る典礼である「釋奠」が境内の大成殿で行われていることも貴重なことです。

道明寺天満宮には、国宝に指定されている菅原道真公の遺愛品を白眉として、重要文化財の指定を受けている宝物をはじめとする文化財が数多く所蔵され、耳目を集めてきました。このたび、同宮より特段のご尊意を寄せていただき、ご所蔵にかかる文化財を『道明寺天満宮宝物選』として、一冊に纏めることになりました。もとより、文化財のすべてを網羅するものではありませんが、解説を付した同宮の宝物図録としては、これが最初です。

道明寺天満宮南坊城充興宮司をはじめ、同宮関係の方がたに対し、厚くお礼を申し上げます。また、ご協力を惜しまれなかつた藤井寺市教育委員会など関係諸機関に対しても深甚の謝意を表します。

平成十九年三月吉日

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長 高橋隆博

目次

ごあいさつ

高橋 隆博

5

図版

伝菅公遺品

古絵図

絵画

古文書・書跡

文芸資料

工芸品

考古遺物

石造物

絵馬

名木

釋奠

各論

道明寺天満宮の歴史

南坊城充興

61

大岡春卜筆「天神画像」―近世天神信仰の一例として―

長谷 洋一

62

道明寺天満宮と天神信仰―文献史料から―

原田 正俊

63

考古資料から見た道明寺（土師寺）

米田 文孝




64

道明寺天満宮の儀礼

南坊城光興

65

凡例

- ・この図録は、道明寺天満宮が所有する宝物の解説付き図録である。
 - ・解説の表記は、図版番号、指定記号、名称、法量（単位はセンチメートル）順に示した。
 - ・指定記号は、は国宝、は重要文化財、は府・市指定文化財および天然記念物を示す。
 - ・卷子装の作品は、部分掲載とした。
 - ・制作年代について、なお検討を要する作品についてはその年代を表記しなかった。
 - ・解説は、高橋隆博、千田康治、千葉太朗、長谷洋一、原田正俊、南坊城光興、宮元正博、森隆男、吉田晶子が執筆した。分担は巻末に一覧で示した。
 - ・解説文中、銘文の改行は／で表記した。
 - ・史料文中の区切りには読点を付し、参考に供した。
 - ・判読できない箇所は□で示した。
 - ・編集はリサーチ・アシスタント宮元正博が主担し、森隆男が調整した。
 - ・写真撮影は宮元正博、米田文孝が行ない、櫻木潤、千葉太朗が補助を行なった。また所蔵者である道明寺天満宮のほか左記の機関から写真の提供を受けた。記して謝意を表する。
- 藤井寺市教育委員会文化財保護課、藤井寺市立図書館、大阪歴史博物館

伝菅公遺品



1 白磁円碗



2 高士弹琴鏡



3 瑠璃装牙櫛



4 銀装革帯



5 犀角柄刀子



6 牙笏



7-1 八稜鏡



7-2 八稜鏡（複製）



8 漆皮箱



9 彫漆屈輪文合子

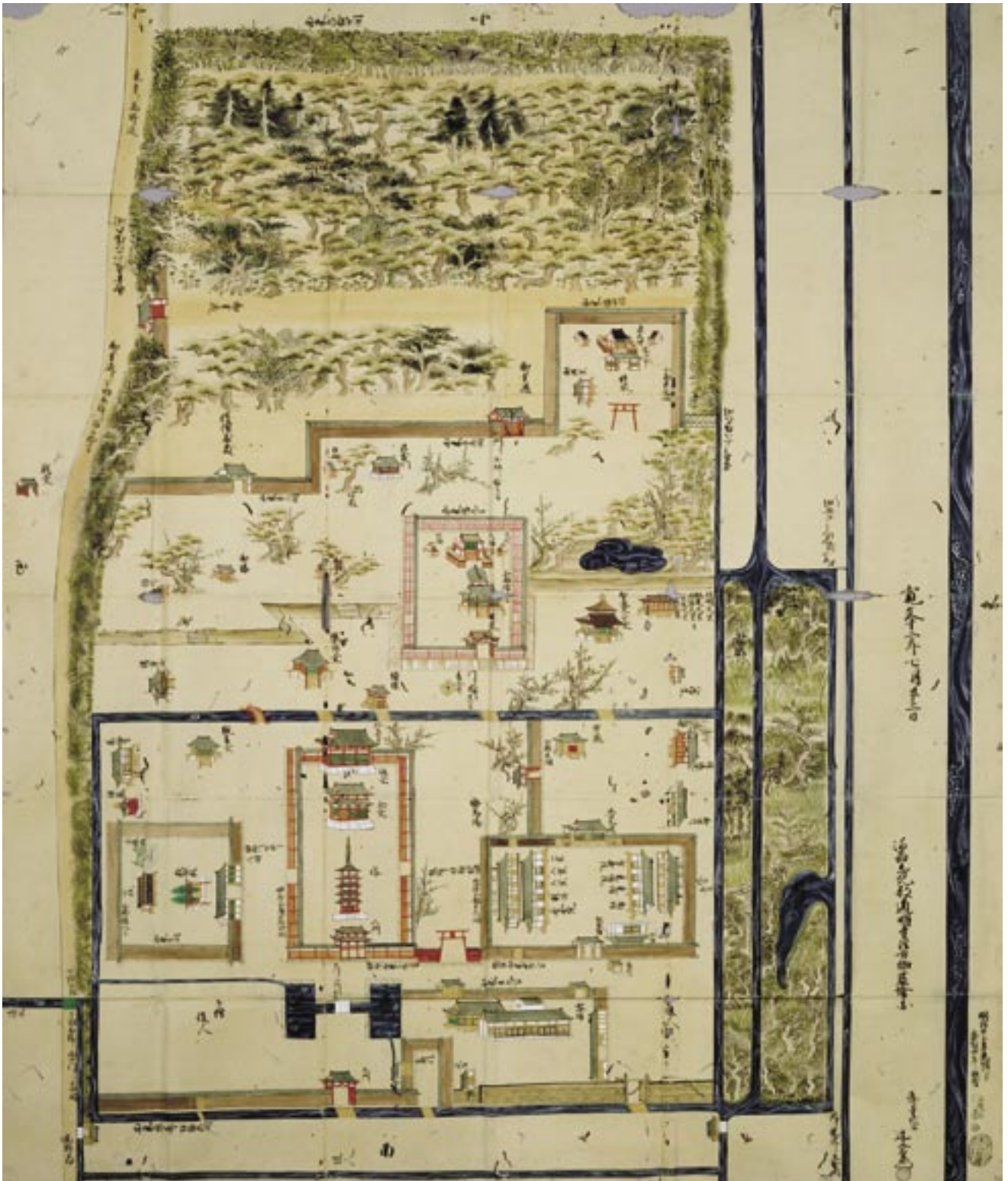


10 木瓜紋折敷「三」字紋散蒔絵螺鈿合子

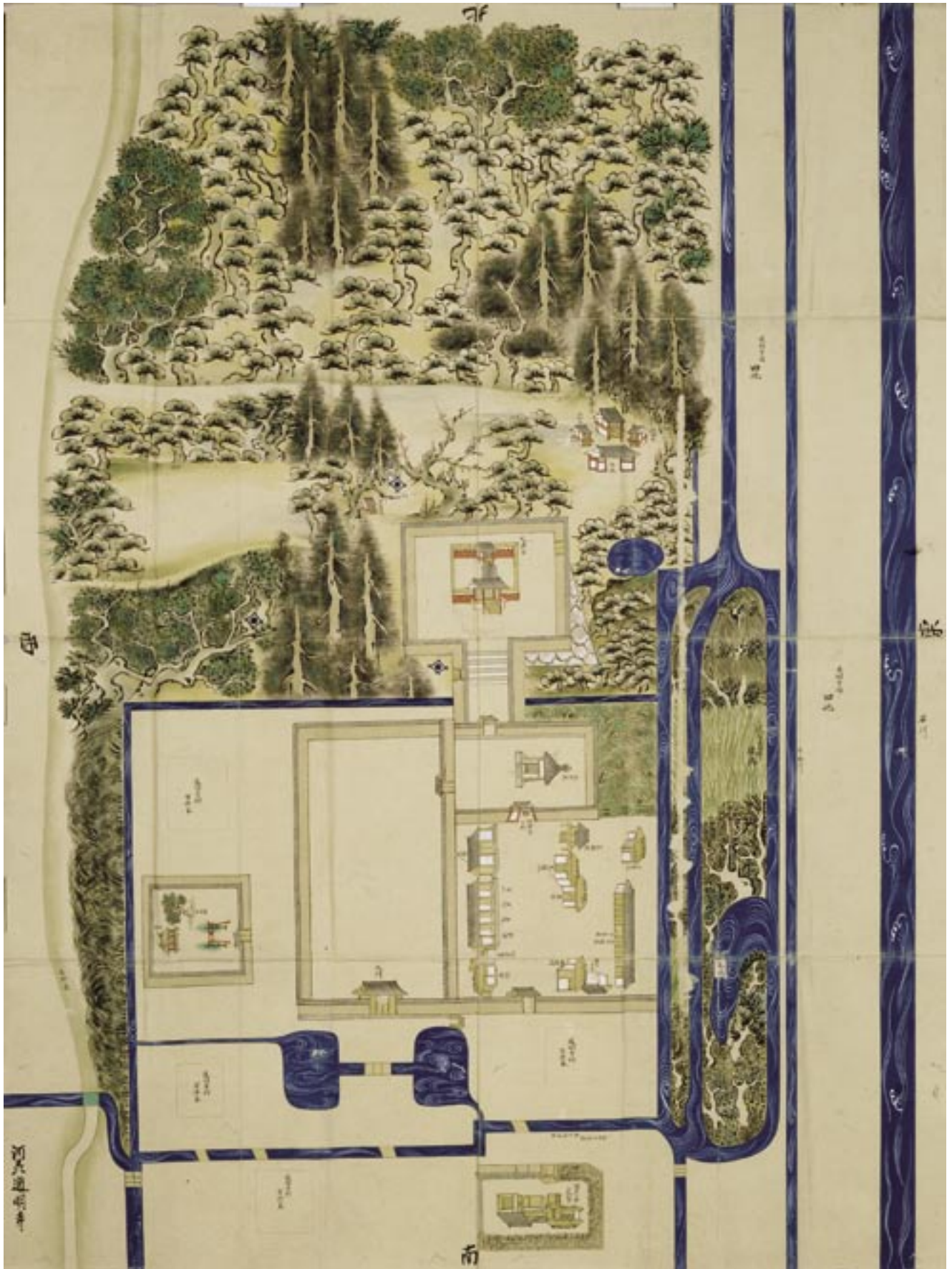


11 彫漆屈輪文箱

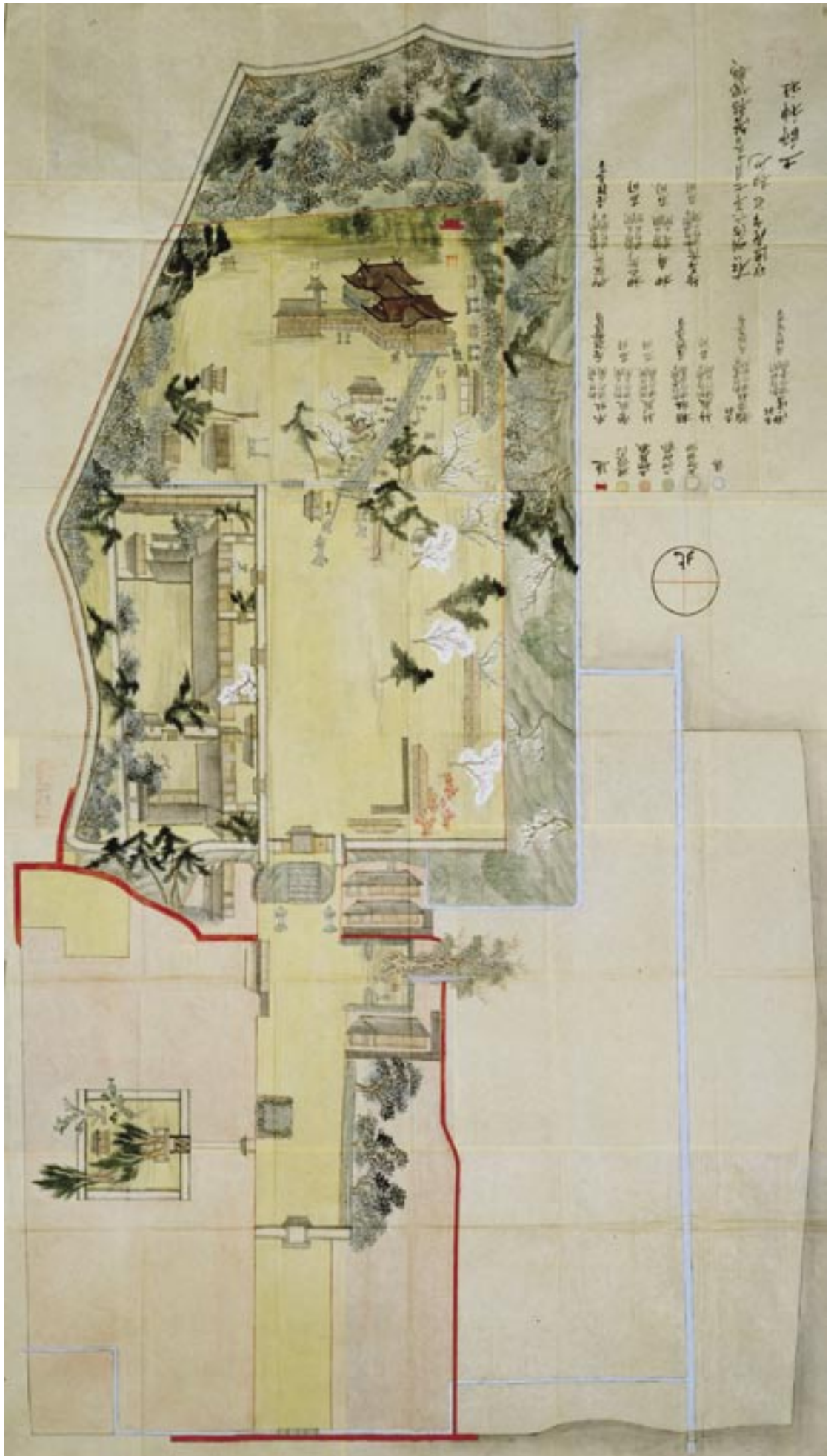
古 絵 図



12 道明寺往古伽藍絵図



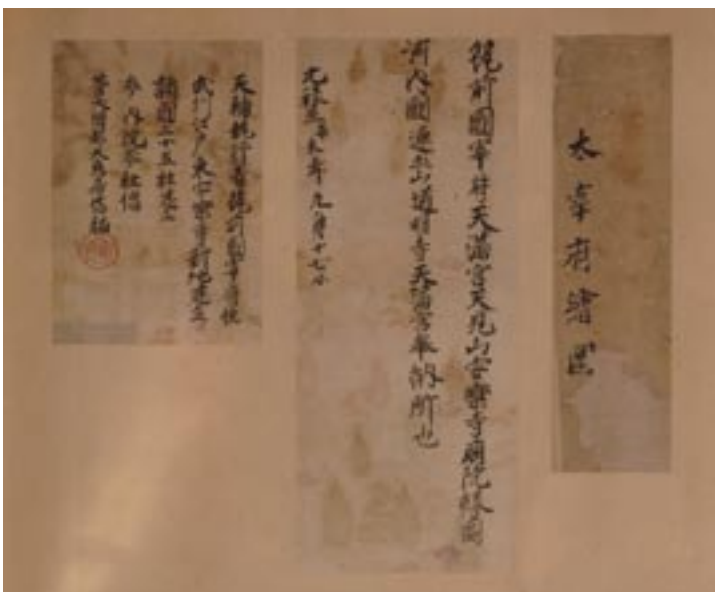
13 道明寺伽藍図



14 土師神社絵図



15-1 太宰府天満宮絵図



15-2 太宰府天満宮絵図貼紙



16-1 ○天神縁起絵扇面貼交屏風（右隻）



16-2 ○天神縁起絵扇面貼交屏風（左隻）





16-1-1 「道真化現」



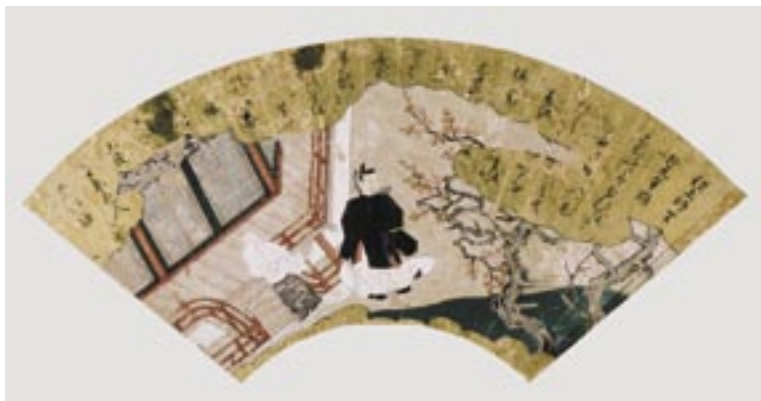
16-1-2 「幼少詩作」



16-1-3 「都良香邸弓遊」



16-1-4 「時平呪詛」



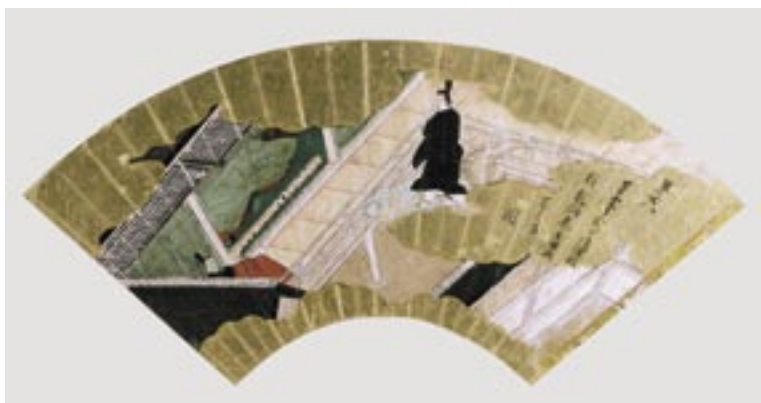
16-1-5 「土師里別離」



16-1-6 「安楽寺埋葬」



16-1-7 「清涼殿落雷（時平拔刀）」



16-1-8 「清涼殿化現」



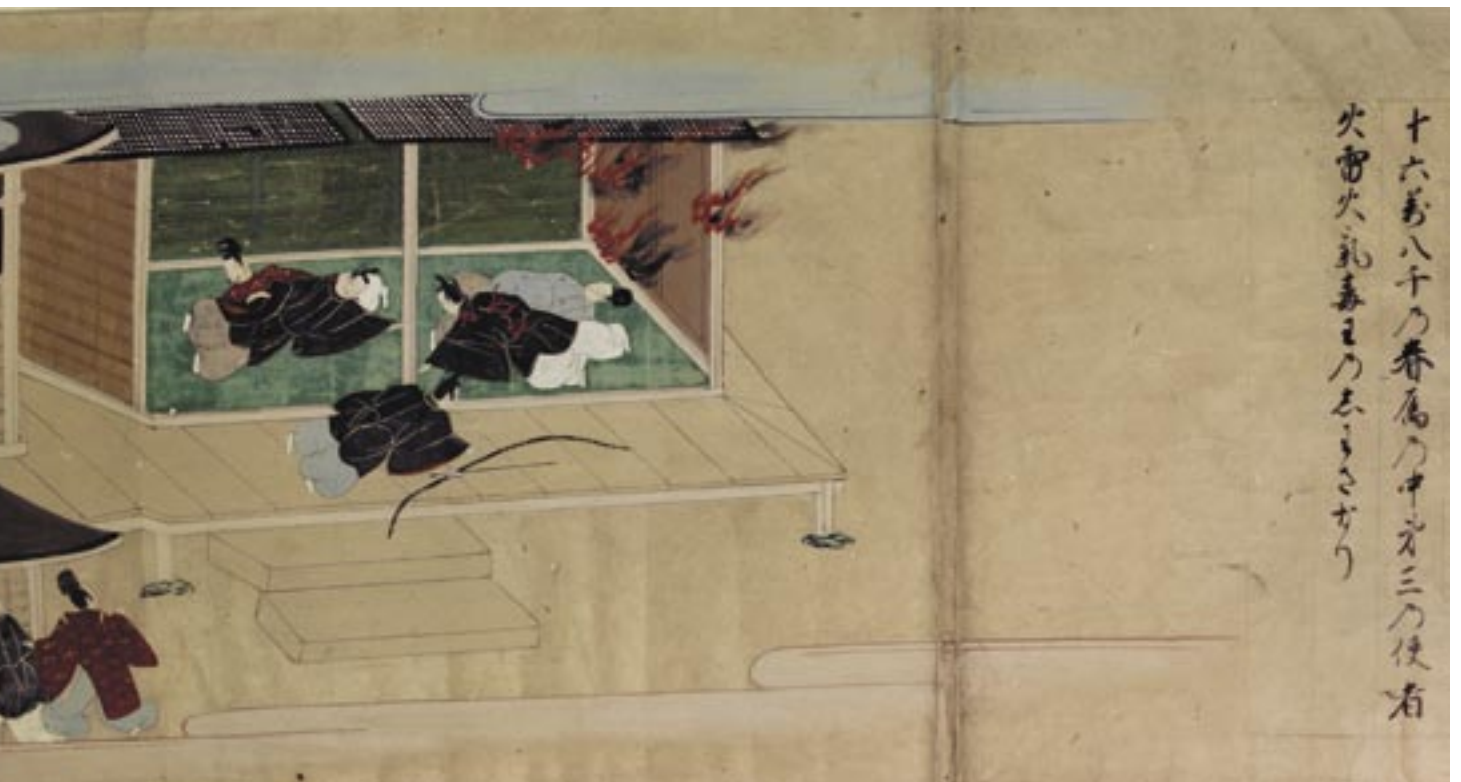
17-1 天神之縁起（「恩賜御衣」）



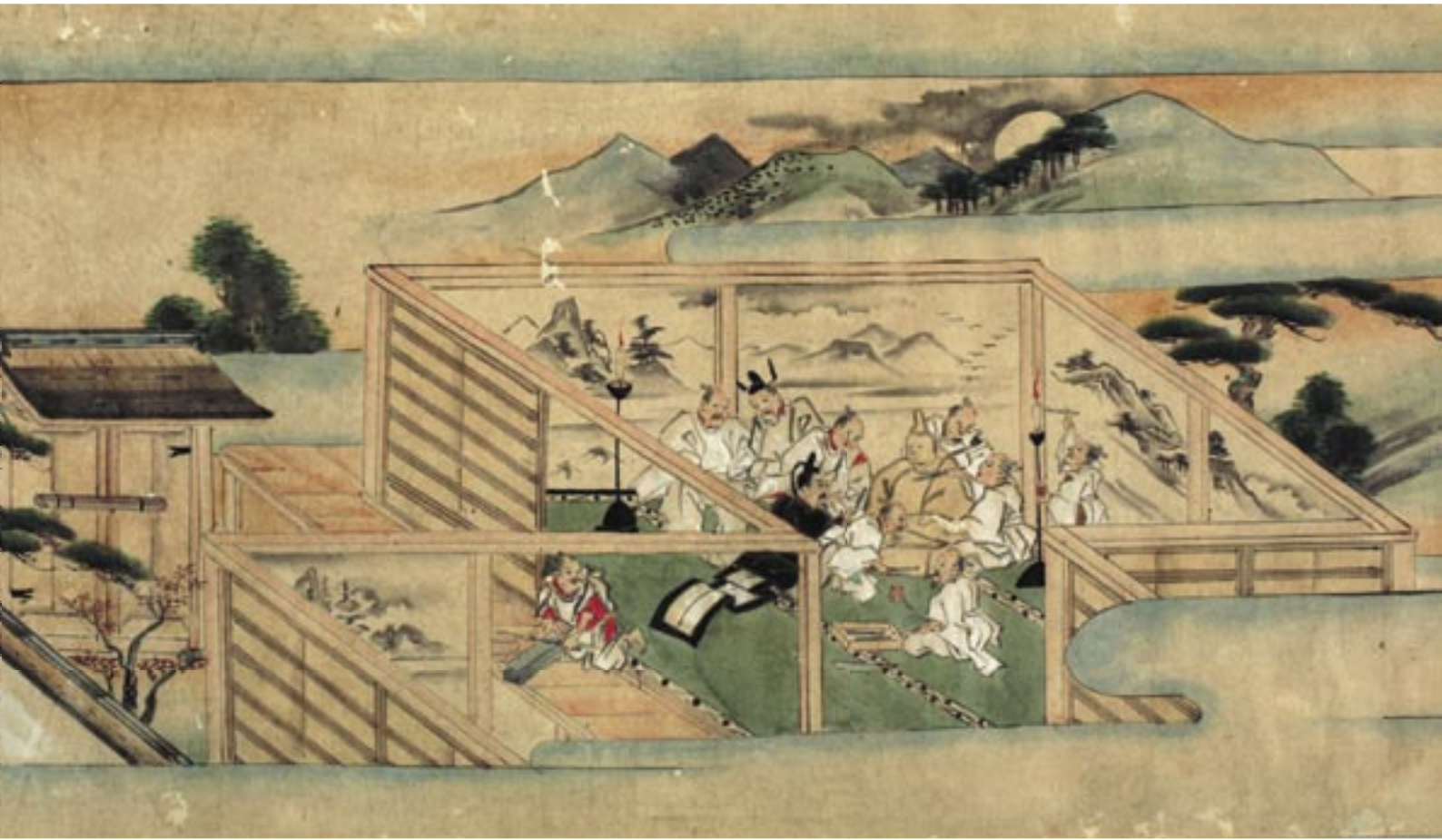
17-2 天神之縁起（「送長谷雄『後集』」）



17-3 天神之縁起（「天拝山」）



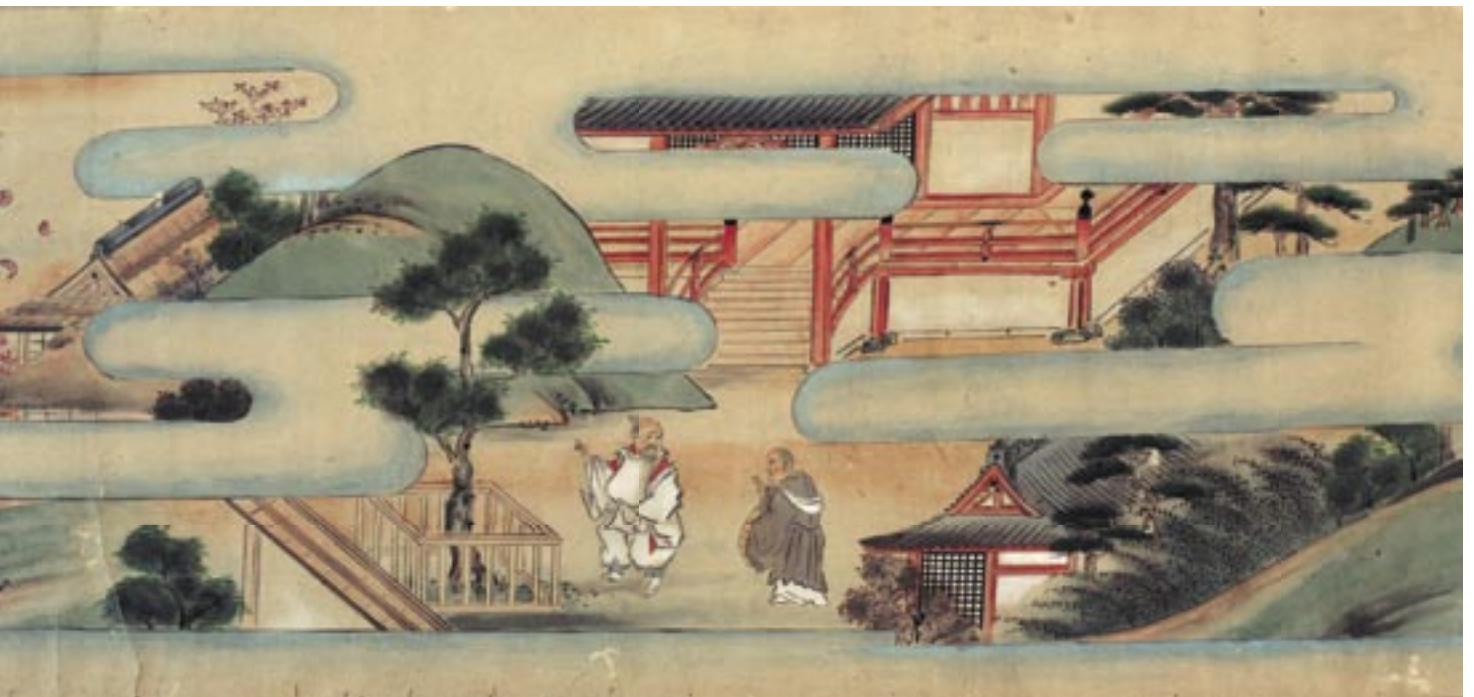
17-4 天神之縁起（「清涼殿落雷」）



18 河州志紀郡土師村道明尼律寺記



瑞瑞堂 一箇
 是ハ幸府ふれもむきたるり付字依
 の月もわうとて我女出現して垂相ノ
 ちわーこちといひ修へ修めぬ
 これをかくいま現ノ寶藏ノあり





19 束帯天神像（大岡春卜筆）



20 束帯天神像



22 渡唐天神像 (伝狩野之信筆)



21 渡唐天神像



24 渡唐天神像（仙厓筆）



23 渡唐天神像（近衛信尹筆）



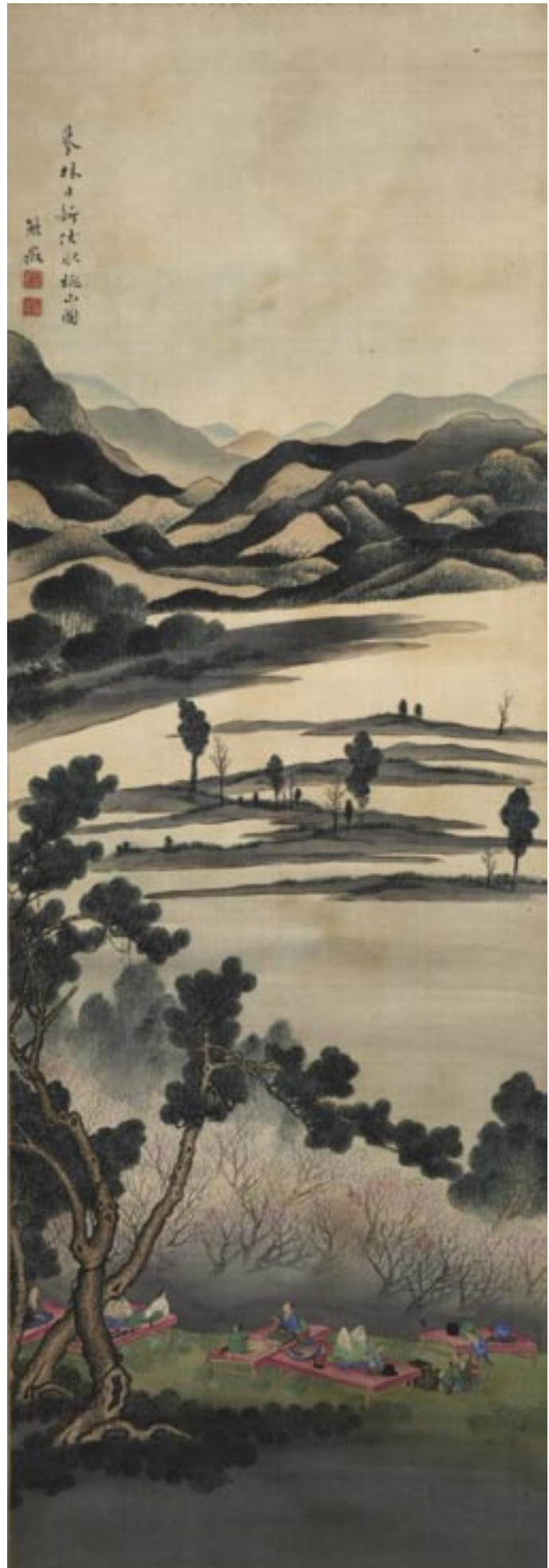
26 渡唐天神像（柳澤淇園筆）



25 渡唐天神像（明正天皇筆）



28 立雛図 (伝円山応挙筆)



27 伏見桃山図 (岡熊嶽筆)



29 老梅図衝立（森一鳳筆）



31 初午図 (生田花朝筆)

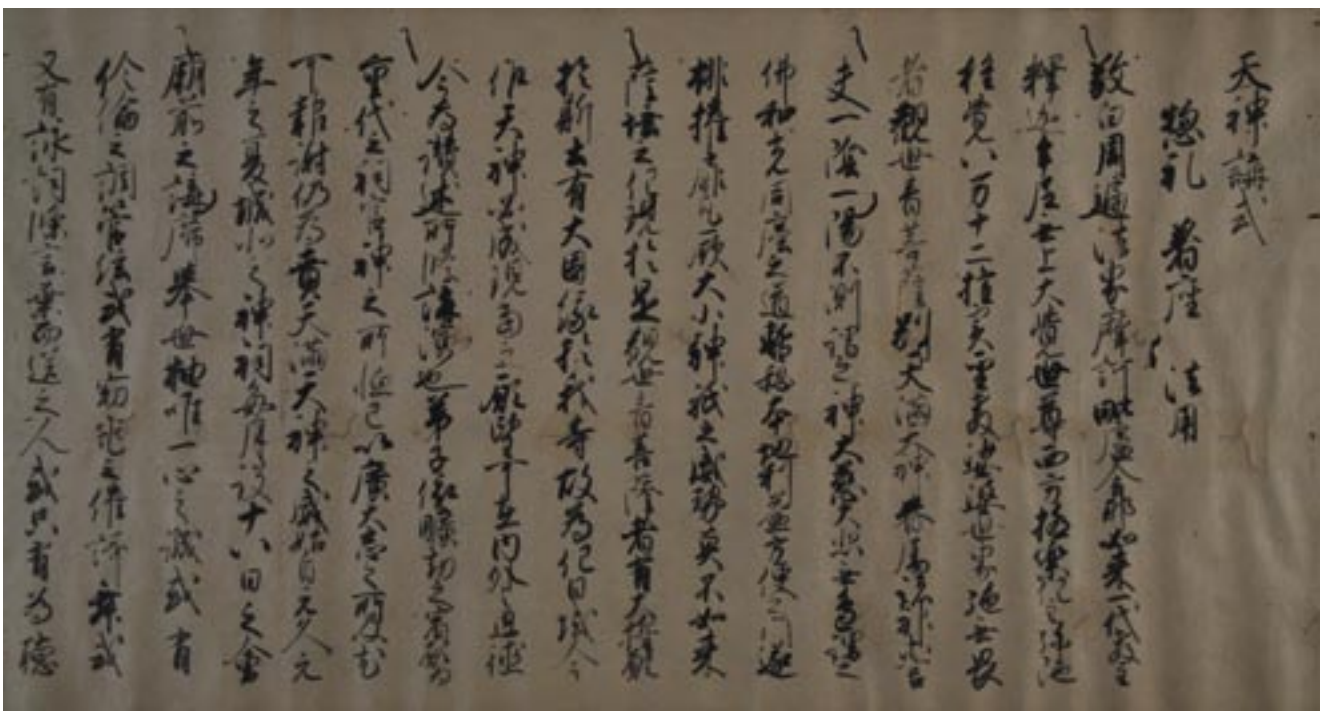


30 神楽舞図 (菅楯彦筆)

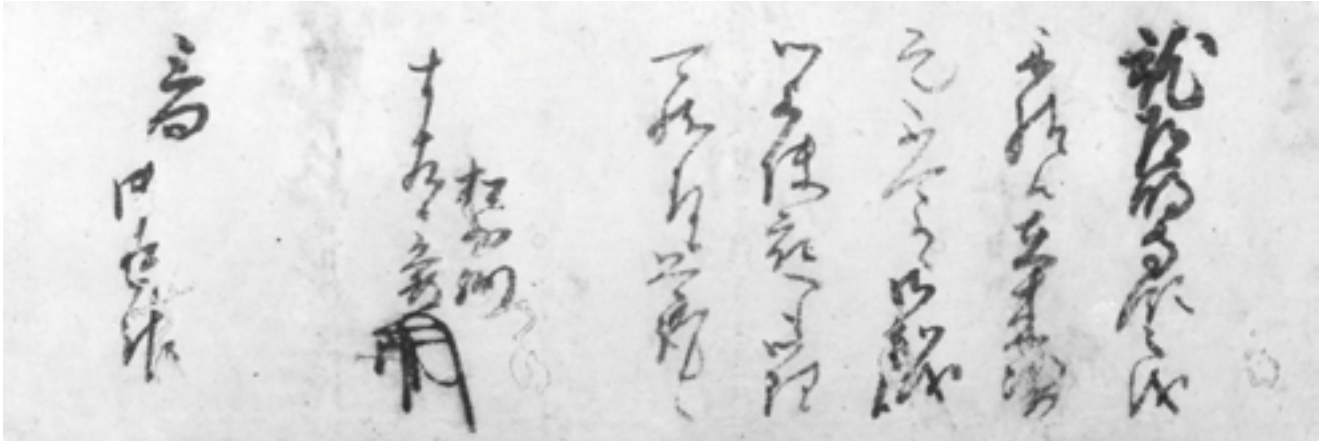
古文書・書跡



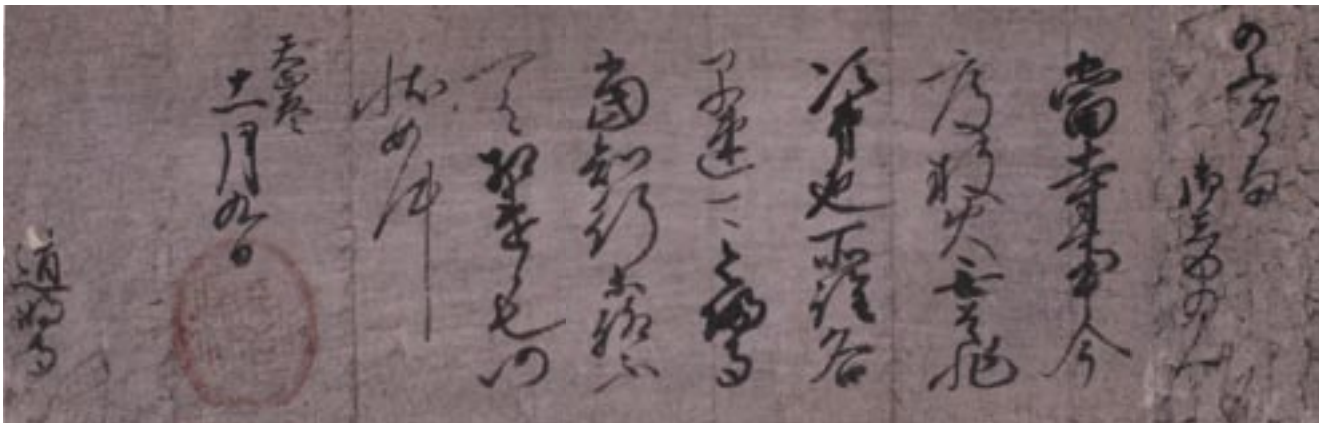
32 鏗阿置文



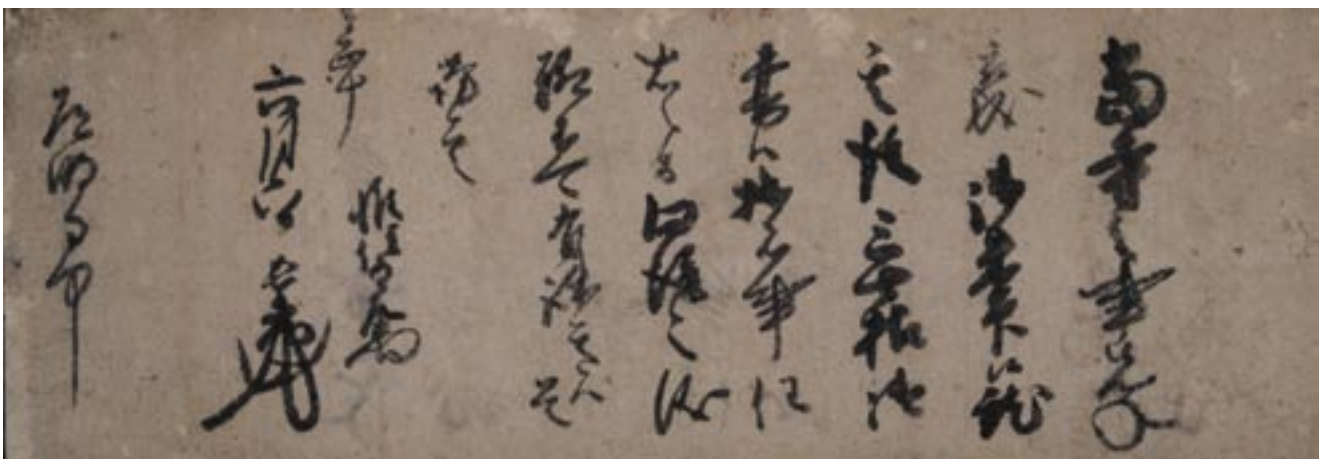
33 天神講式 (尊円親王筆)



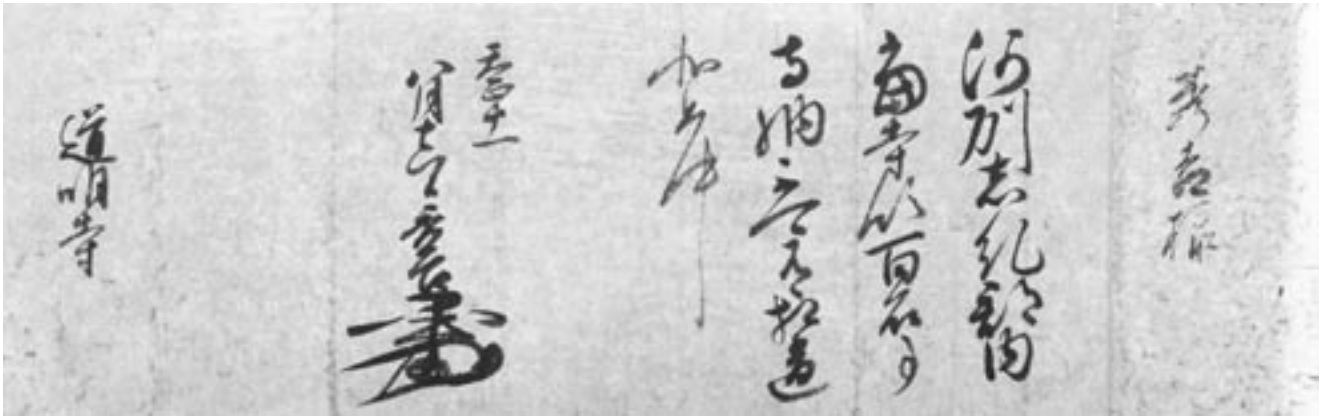
34 松永久秀書状



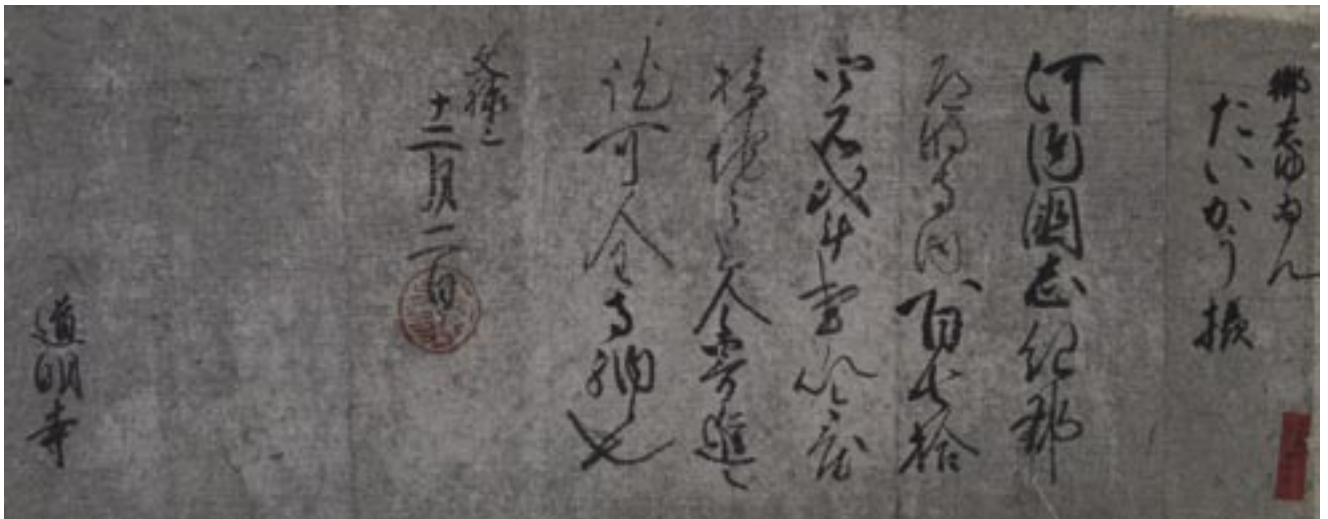
35 織田信長朱印状



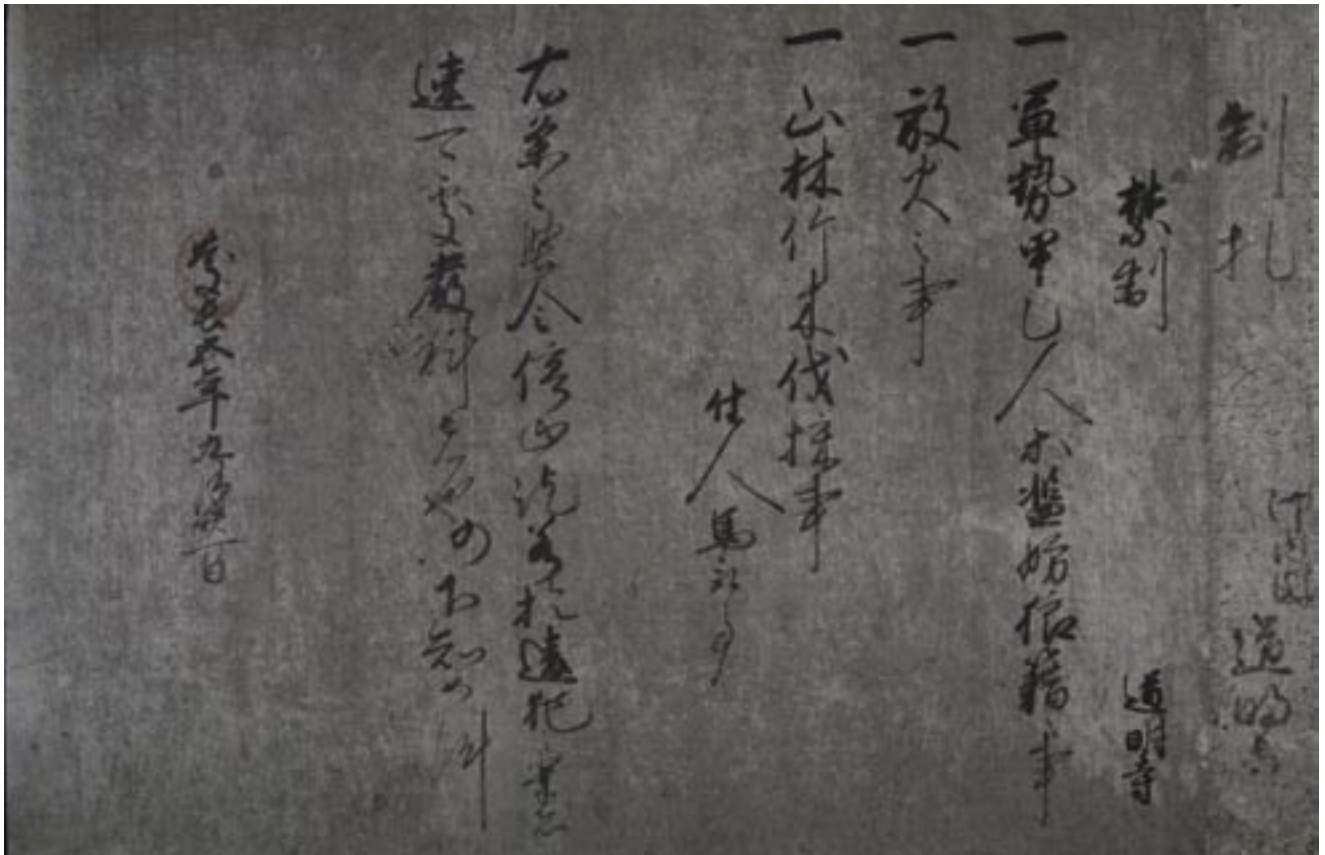
36 丹羽長秀判物



37 豊臣秀吉判物



38 豊臣秀吉朱印状



39 徳川家康禁制



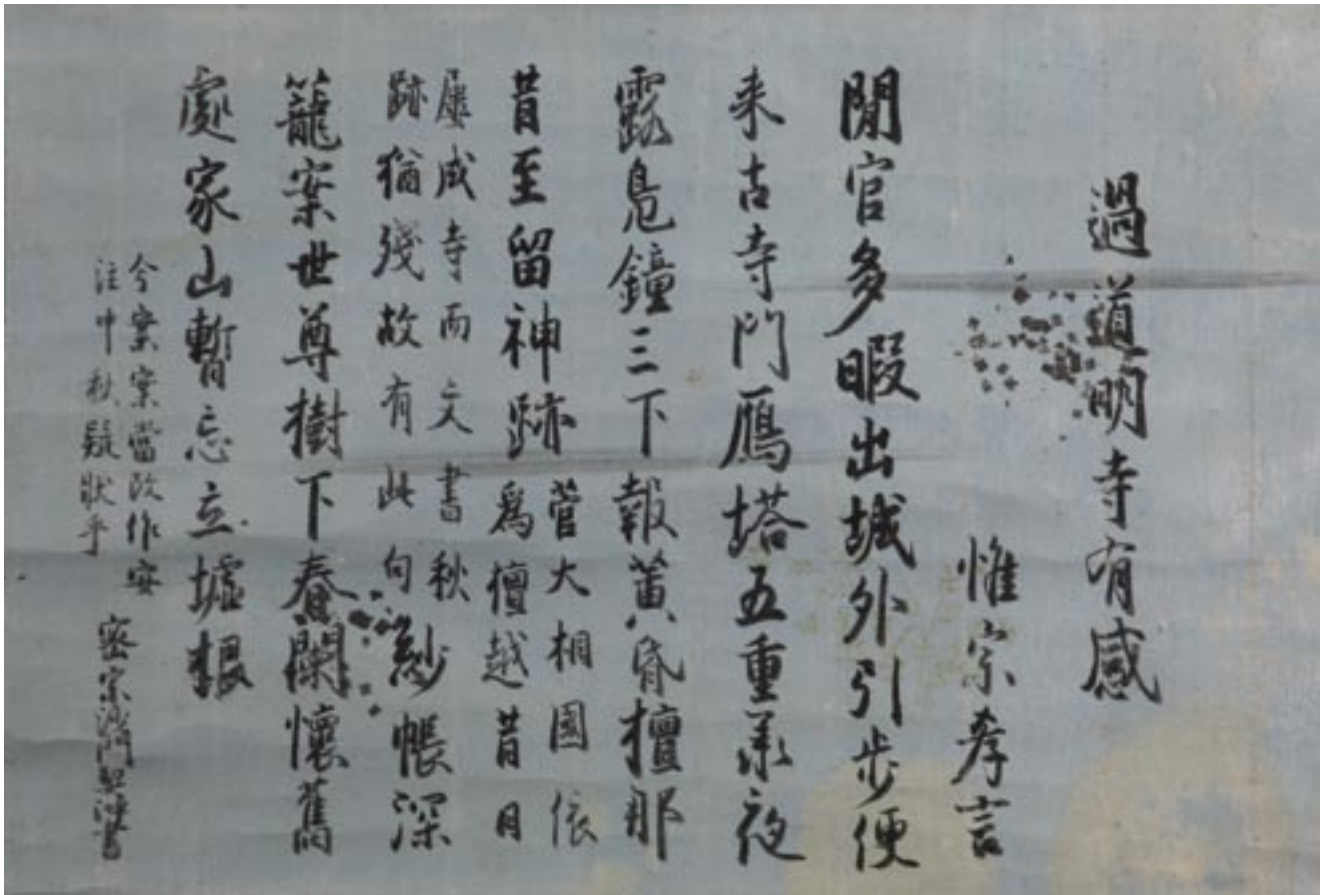
40 切支丹制札

非曾種蠶思元亮為是花時供世尊五季
 三秋玄海上滿天氣霧隔重瀾
 自有殊恩拓大元先知豈諫避權謀
 西宮試植春楊柳空作飛零五季秋
 皇天定後降威新非是為霆泄然瞋不朽
 雖然垂事業何如遂義托明神

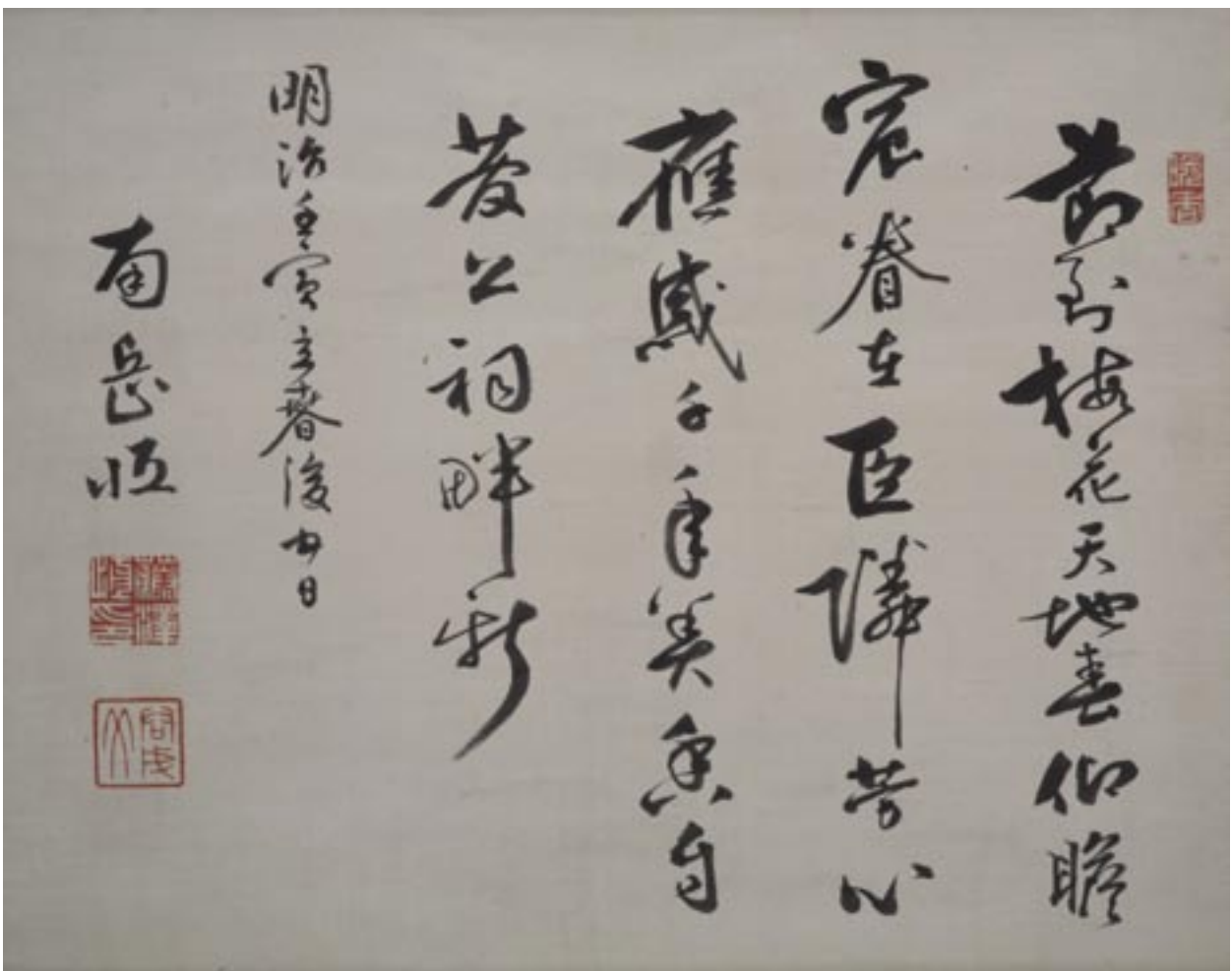
北野神廟大祭徵霸下詩書畫及芑等恭錄舊詠三首上
 祠前 壬子之歲仲春 高屋村儒貫石芑沐浴敬題



41 七言絕句三首（貫名海屋筆）



42 惟宗孝言詩軸（契沖筆）



43 七言絕句（藤澤南岳筆）

管家文章卷第一詩一
 月夜見梅花 齊野三年己亥丁卯年十一月一日進士
 沈之平始言的故或屬首
 月裡如暗雪梅花似照星丁博金鏡鑿上玉房營
 臘月獨興 天保二十一年
 丁卯年十月四
 玄冬律迫云地差運喜向春不收餘欲盡寒光休矣 一子
 休
 將來暖氣宿誰家水封水面開無浪雪照林頭見有化
 可恨未知幼學業書丹窓下過年華
 殘菊詩 十物與絕二年
 丁卯年十二月
 十月玄矣至三分感候休暮陰芳草秋殘色菊
 為是開時悅當因發處稠深紅表葉病辭紫无
 露洗香難盡霜濃飽尚幽低迷涉砌脚到血
 秋欄預秀掩燈照風披匝麝浮蛛細猶得衣蜂採不
 知秋已謝陶家酒得隨那水流愛看寒暑急寒燭豈春
 遊
 賦得赤打扁一首 七言十句自此以下四百餘首
 進士李安名每日試之其有較
 十首休去後丁說也
 陰陽無理自多功氣象裁成望赤打拳眼悠宜而後
 迴頭妙在天東矣涼有序知盈縮表裏無私辨始終

44 管家文章（長有筆）

新撰萬葉集卷上
 管右大臣閣下作
 夫乃其集為古歌之流也非未嘗稱故言葉之名寫况
 漫不屬野衙之音予見說古者飛文津輪之士樂詠吟
 之容青春之時玄冬之節隨見而興既作輒輟而感自土
 厥所平稿不知幾千漸尋筆墨之跡文句錯亂非詩非賦
 字對難持難入難悟所謂仰彌高鑽彌堅者予然而有意
 進與留者退而已於是奉綸綍緝緝之外更在人口唇以撰集
 成數十卷裝其要錄編區待價噴愧非凡眼之取可及當今平罕
 上方後餘暇纂宮而方有乎合款後進之詞人進習之才予各款將
 之秋初成在重之宴又有餘與同如恩惠之二錄情見秋林雜故見古
 知今而以今比古新作花也曰家實也以花比實今人情秋勞錦多
 迷可憐之句白人心緒纖素火綴不愁之態仍危右上下兩軸三
 百首首句曰新撰萬葉集先生非當實任秋之佳處亦綴絕
 之詩押教首之危處使家之好事常有采度之勳處遊容
 鎮作竹雲之過千將寬平五載秋九月廿五日偷書前世之友
 而新後世之闕云尔

45 新撰萬葉集

瑠璃壺之詠歌百首者

菅相公政事餘暇樂詠吟嘯而自的、心
 竹稿納瑠璃器昌恭年中尤遷之時
 又携一器下筑石隨見興已作觸聽
 而感自生之和歌百首改以入壺中
 聖化上天之後度會神主飛鳥春彦有
 故給瑠璃壺矣春彦者飛鳥冬綿
 同胞之弟度會大神主高生子白
 太夫是也與

菅聖友善筑石尤遷之時隨下
 聖化後隱京師事果而神上焉
 菅相公神靈輝天下 北野宮祠禰

46 瑠璃壺之詠歌百首（岬山元賢筆）

河州土師村道明尼律寺記録

茅舎之号
 河州土師村道明尼律寺
 全宗表紙七拾二枚
 全宗表紙七拾二枚

茅舎之号
 河州土師村道明尼律寺
 全宗表紙三枚

47 河州土師村道明尼律寺記録

工 芸 品



48 ◎笹散蒔繪鏡箱



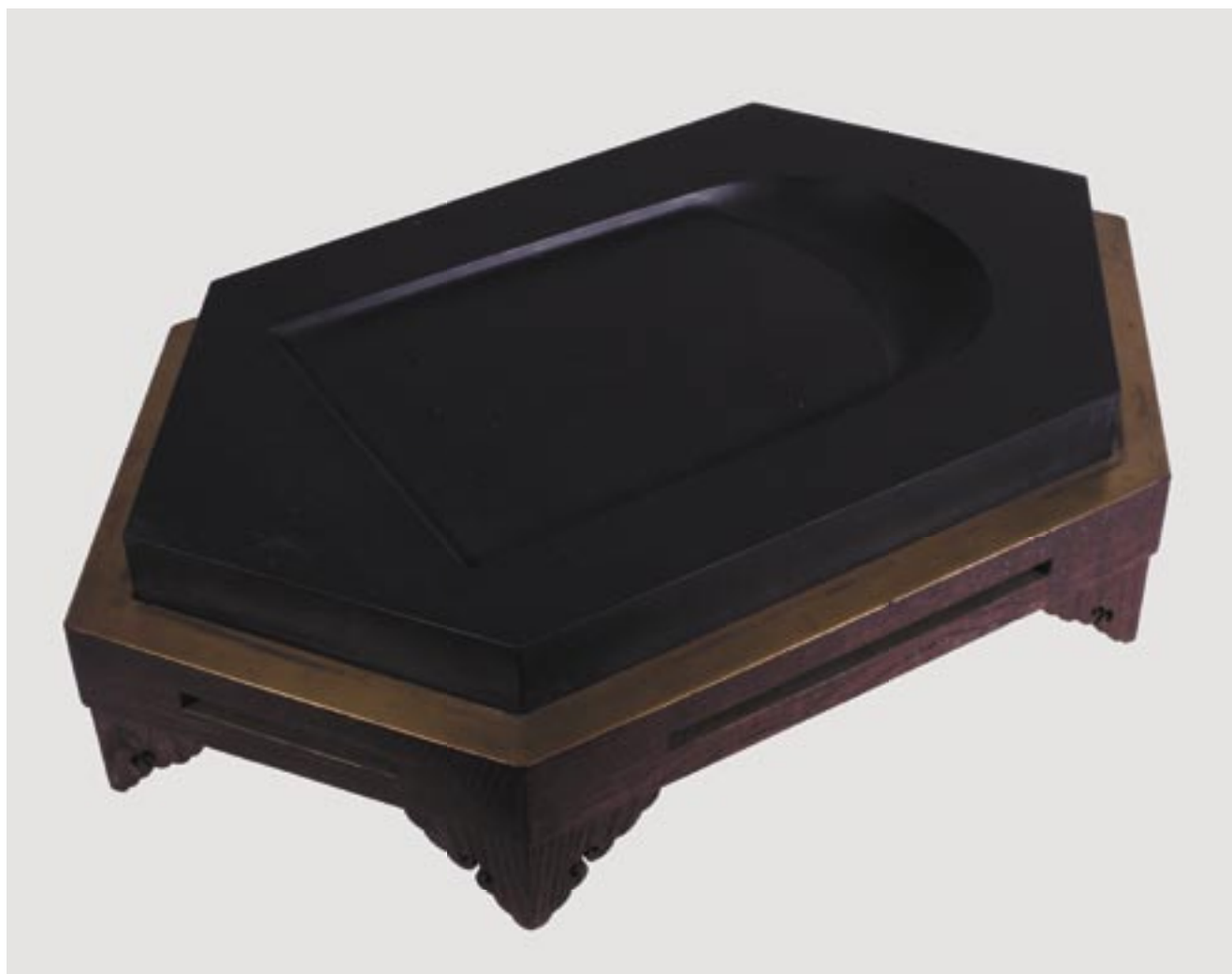
49-2 ◎笹散双雀鏡（鏡表面）



49-1 ◎笹散双雀鏡（鏡背面）



50 唐石梅竹硯



51 硯



52-1 漆塗箱



52-2 同箱朱塗銘



52-3 同箱紐金具



54 劍



53 ○脇差



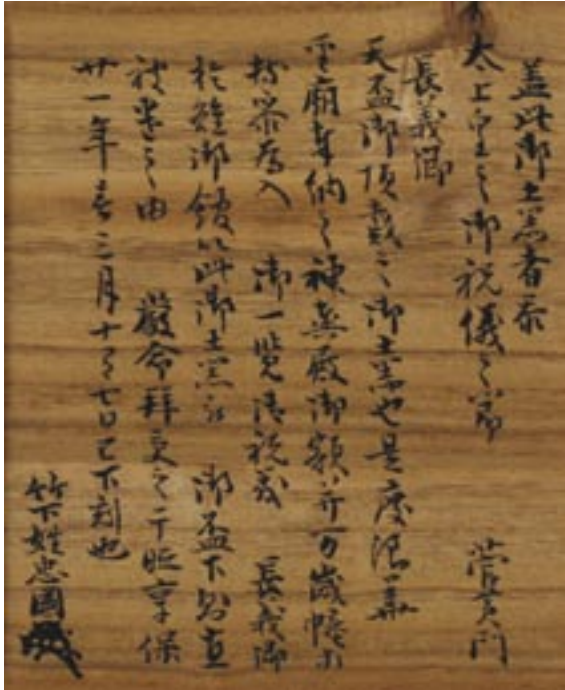
55-3 同箱



55-2 同拵



55-1 三鉗柄劍



56-2 同箱墨書銘



56-1 天盃



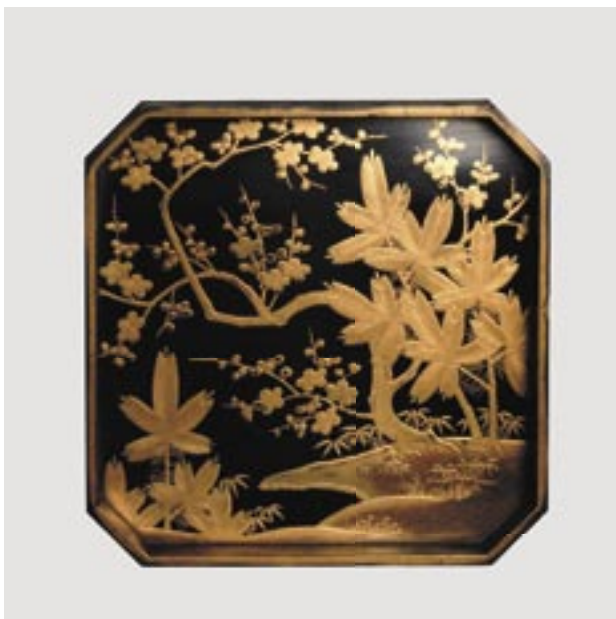
58 五鈎鈴



57 瑠璃壺



59 本殿（正面）



60-2 同鏡板



60-1 四方衝重



61-2 同銘



61-1 四方衝重



62 瓶子



63 宝珠型水器



64 金銅製舍利器



65 「太宰府天神」字芦屋釜



66 青銅製狛犬一对

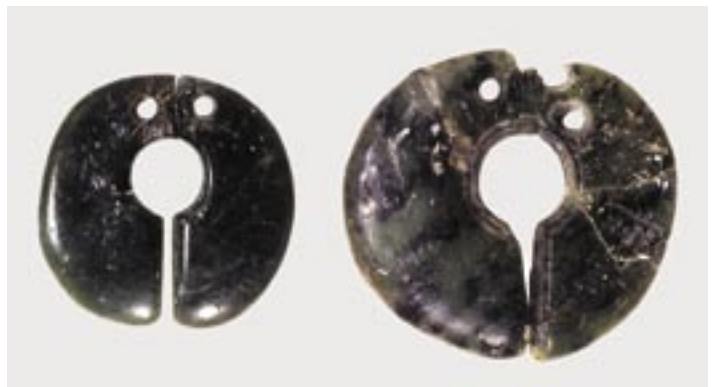
考古遺物



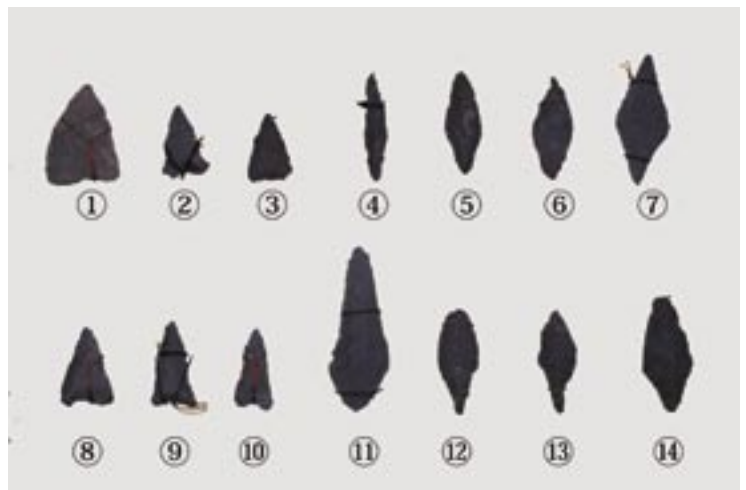
67 軒丸瓦



70 板碑



68 〇玦状耳飾



69 石鏃

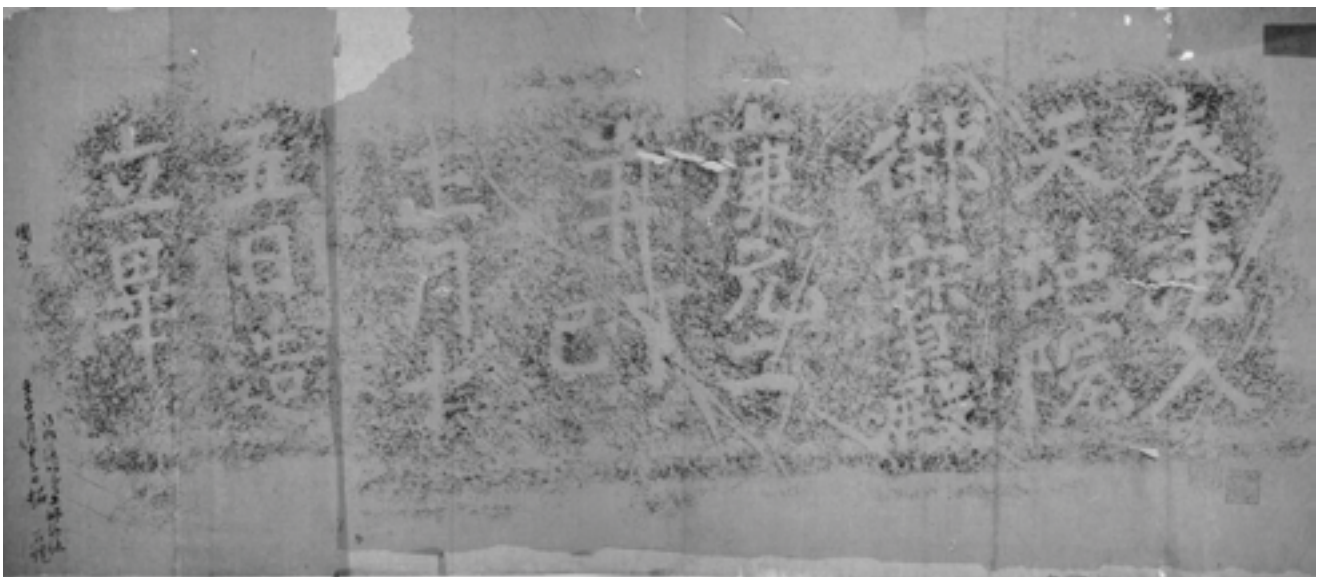
石造物



72-1 石灯笼



71 石灯笼一对



72-2 同銘



73 石柱



74 石製井戸枠



75 玉垣

絵馬



76 消防演習図絵馬



78 猿曳図絵馬



77 騎牛吹笛図絵馬

名 木



79 楠



80 木槵樹

釋 奠



81 大成殿



82 大成殿完成予想図



84 孔子像



85 媽祖像



83 對聯



86 釋奠祭



87 釋奠祭 祭壇

道明寺天満宮の歴史

道明寺天満宮 宮司 南坊城充興

藤井寺市道明寺に鎮座する道明寺天満宮は、菅原道真公、天穂日命、道真公の叔母である覚寿尼公をお祀りし、全国一万二千社の天満宮の中でも、取り分けて菅原道真公のご先祖の地であるとともに、唯一道真公の遺品が国宝として六点収蔵されている点で由緒正しき社です。なお社史を語るに、天満宮と道明尼寺は明治五年まで同一境内に本殿と本堂を有する神宮寺の形式を有し、時代時代の歴史の波に翻弄されながら現在に至っています。それ故、天満宮と尼寺は互いに太子信仰と天神信仰が共鳴して相乗効果で発展してきた経緯があり、一方のみで由緒は語れないものがあります。

垂仁天皇の三十二年、相撲の祖といわれる、天照大神の御子天穂日命の十四世の孫である野見宿禰が、「はにわ」を創って殉死に代えた功績で、「土師」の姓とこの辺り一帯を所領地として賜わって以来、遠祖天穂日命をお祀りしたのが土師神社の始まりです。その後仏教が伝来し、推古天皇二年（五九四）、聖徳太子の発願により、土師八嶋が自宅を喜捨し土師寺が建てられました。

その土師氏は道真公の曾祖父である土師宿禰古人の時、桓武天皇の外祖母が土師氏の出身でしたので、請願文を奉り、天応元年（七八一）、「菅原」と改姓が認められました。菅原氏は文章博士を兼ね当代一流の学者の家系が形成されました。当地には道真公の叔母様であります覚寿尼公がお住まいになられていたことから、道真公は当地を度々訪問されます。三十六才のときには十一面観音像（現道明寺御本尊、国宝）を彫られ、四十才のときにはひと夏当地に滞在され、夏水井の水を汲み白磁円硯（一）により、五部の大乘経を写されました。その経巻を埋納した経塚から、胚芽が経巻の形をした「もくげんじゅ」が生え、謡曲「道明寺」として有名になりました。

また、昌泰元年（八九八）十月、宇多上皇の大和河内御巡幸の際にも当地に宿泊され「雨中錦を衣て故郷に帰る」と漢詩に詠まれたことから、公はこの地を第二の故郷として慕われていました。

やがて五十七才にして従二位に進まれましたが、無実の罪で九州大宰権帥とし

て淀川を下られることになり、その舟の中で、

世につれて浪速入江もにぐるなり 道明らけき寺ぞこひしき

と詠まれ、道明寺への訪問を許されました。そして、この道明寺で覚寿尼公との別れを惜しまれ、八葉御鏡（七）にお姿を映されて犀角柄刀子（五）で自像を荒木に刻まれ、

鳴けばこそ別れも憂けれ鶏の音の なからん里の暁もがな

との御歌を残されて西海に赴かれました。この説話により、『菅原伝授手習鑑』が延享三年（一七四六）に大阪の竹本座で初演され、今に至るまでも人気の浄瑠璃となつていきます。

公は無実の罪であっても、ひたすら謹慎のまことを尽くされましたが、延喜三年（九〇三）二月二十五日に五十九才で亡くされました。

その後、天曆元年（九四七）に遺し置かれた木像を北丘にお祀りし、ご遺品をご神宝として安置し天満宮を創建、土師寺を道明寺と改称しました。平安時代後期の河内国府の役人、惟宗孝言は、「道明寺を過ぐるに感有り」と云う『本朝無題詩』の中で「昔大相国（道真公）檀越になすに依、昔日しばしば此寺に來たり、文書状跡なお残る」と詠みました。延慶三年（一三二〇）には西琳寺の僧鏗阿に神託があり八葉御鏡に勅封を賜りました。

天正三年（一五七五）、当国高屋城の兵乱に、社殿等が焼失しましたが、幸いご神像と宝物等は難を免れ、この年織田信長公より、また天正十一年（一五八三）と文禄三年（一五九四）には豊臣秀吉公より、さらに徳川幕府よりも代々の寄進があり、享保年中に靈元法皇、中御門天皇より女房奉書を賜ってから明治初年まで毎年初穂料が下賜されてきました。

正徳六年（一七一六）の石川の氾濫により、坊舎等は北丘の神社境内に移り、明治五年（一八七二）、神仏分界により、五坊の中、二之室が神職家となり、道明寺は道を隔てて西に移築され、現在に至っています。また、明治十年（一八七七）には明治天皇の行幸の際、行在所となりました。平成十四年（二〇〇二）には菅原道真公千百年大祭を齋行し連綿と天神信仰を今に至るまで護り伝えていきます。

大岡春卜筆「天神画像」——近世天神信仰の一例として——長谷洋一

道明寺天満宮は、渡唐天神像をはじめ多数の天神像や絵画作品を所蔵しており、その一部はすでに『藤井寺市史』などで紹介されている。ここでは所蔵資料の中から大岡春卜筆「天神画像」を取り上げて紹介することにした。

大岡春卜筆「天神画像」（紙本着色 一七〇・五×九四・五センチ）は、上置座の上に褥を敷いて右向きに坐した束帯天神像である。縷を背後に垂れた巾子冠を被り、唐草の地紋をほどこした袍を着し、白袴をはいて両手で笏をとる。装束は肩をいからせ眉を寄せて眼を見開き、口髭、鬚鬚をたくわえ、小鼻を膨らせて上歯で下唇を噛んだ怒りの表情は独特の雰囲気をかもしだしている。背後には松などの添景は描かれておらず無地のままである。

多くの束帯天神像が肩を大きくいからせ、鋭い稜線で強調された袍の折れ目や衣褶が生み出す直線によって幾何学的な面をなした威儀を正した姿で表されるのに対して、本作品は肩を大きくいからせるものの、袍の稜線や衣褶は丸みを帯びて柔装束の姿で表されている。

画面右下隅には「法眼春卜雪静筆」「雪静之印」（白文方印）「愛董」（朱文方印）の落款印章があり、裏面にも「奉納 寛保元載／辛酉梅月下五日」「願主 大岡氏／神谷氏／小堀氏／同名／宮木氏」「得寶院 貳之室 執次」の墨書が認められる。共箱蓋裏にも同旨の墨書があり、願主が大岡春卜、神谷與兵衛、小堀屋清五郎、同助次郎、宮木太郎兵衛の五名であることがわかる。また黒漆塗りの軸木端には金蒔絵で「蒔絵師／願主 池原九兵衛（花押）」と記されている。このことから本作品は大岡春卜らを願主として得宝院二之室が取次となつて寛保元年（一七四一）五月二十五日に道明寺天満宮へ奉納された掛幅であることが判明する。

周知のように大岡春卜（一六八〇～一七六三）は、狩野派の流れをひく初期大坂画壇の重鎮であつた画人で、多数の絵本をなしたことも知られる。享保二十年（一七三五）に法眼位を叙し、元文四年（一七三九）には嵯峨・大覚寺寛深門主の家臣に召し抱えられており、大坂のみならず京都・妙心寺梅院などにも作

品が残る。本作品奉納の前年には『画巧潜覧』を著している。

道明寺天満宮は、元文三年から本殿の改築、幣殿・拜殿の建替が行なわれている。同年に普請願が出され、元文五年には普請のための仮本殿と仮拜殿の建立願が出され、翌寛保元年十二月十八日に普請が開始された。社殿には延享二年（一七四五）の祈禱札があることから上棟はこの時期とみられる。

大岡春卜自らが願主となり、彩管をふるつた本作品はこうした状況下の道明寺天満宮に奉納された。画面背後に松など一切描かれない点は古式の束帯天神像を思わせ、さらに紙本の画面ながら多数の願主が集い、軸木を黒漆塗りとするなど、同時期の束帯天神像とは制作状況をやや異にしており、春卜以外の願主については不明であるものの、本作品の制作奉納は社殿の改築整備という特殊な事情のもとに制作されたことがうかがえよう。銘記からは春卜らと道明寺天満宮とを結びつけたのは得宝院であつたことも知られる。

得宝院は、三井新町家二代三井八郎右衛門高方（宗億）が、京都四条道場で行なわれた宝物開帳の際に菅公木像を寄進した縁で、享保二〇年（一七三五）に先祖代々の菩提回向のため六時念仏を興し、翌元文元年六月に「一山衆中之内一藪隠居所」として建立されており、以後三井家の外護にあずかつている。本作品制作の背後に三井家の関係も想像できるかもしれない。

なお大阪天満宮には、大岡春卜が描いた柔装束姿の束帯天神像が所蔵されていることが報告されている（注）。いま、両者を比較検討する余裕はないが、大岡春卜の束帯天神像を考察する上でも興味深い一本であると思われる。

（注）松浦清「大阪天満宮『天神画像』」（『美術フォーラム21』創刊号 一九九九年十一月

道明寺天満宮と天神信仰―文献史料から―

原田正俊

明治初年の神仏分離以前は、道明寺と道明寺天満宮は一体であり、道明寺において天神信仰が宣揚された。道明寺が菅原道真（八四五〜九〇三）没後、天神信仰の一つの中心地となったことは間違いないが、確実な文献史料でその信仰の様子がわかるのは、延慶三年（一二二〇）六月一日付の西琳寺僧鏝阿が記した置文である（32）。

これによれば、延慶三年、大和国室生山灌頂院で伝法灌頂が行なわれ、その折、天満天神が影向し、鏝阿という僧に以下のことを告げた。

道明寺の宝蔵には菅原道真の愛用の品々がのこされているが、そのなかでも八葉御鏡は道真が日々手を触れ、姿を映したもので重要なものである。しかし、近年、甲乙の輩が結縁と称して鏡に触れ、墨色も薄れ輝きを欠いてきている。こうしたことは、はなはだ怪しからぬことである。この鏡は天神である道真の「真体」であり、速やかに封印するようにと言った。また、鏝阿の側にいた道明寺の下司である忠仲に対し、天神はこのことをすぐさま披露するように命じた。この神告に畏れおののき、鏝阿はこの置文を記したとする。

この史料から、鎌倉時代後期には、道明寺は菅原道真遺愛の品を所蔵する場所として信仰を集め、人々が結縁のため集まり、その品に触れていたことがわかる。そして、道真ゆかりの鏡が封印されることによりさらに聖性を増したと考えられる。

この神託がおりた場と関係した人々に注目すると、伝法灌頂は密教の法脈伝授の重要な儀式であり、そこに出席していたのは室生寺の忍空、和泉国久米田寺の禅爾、そして鏝阿は河内西琳寺の僧であった。

忍空は京都泉涌寺で律を学び、東大寺戒壇院円照の弟子となつて戒律を重視するとともに密教僧としても活躍した人物である。西大寺叡尊の弟子として活動し室生寺の復興で知られる。禅爾は円照の弟子である八幡大乘院の琳海に戒律を学び、東大寺戒壇院の凝然に華嚴を学んだ。さらに、臨済宗の無本覚心のもとで禅を修し、禅律僧として活躍した。久米田寺に招かれ久米田池の修築のための勸進

活動にあたつてゐる。久米田寺は北条得宗に關係深い安東蓮聖の後援を受け復興され、禅爾はその帰依をうけた。また、道明寺は、この地において叡尊が河内国一國諸宿文殊供養を行ない、こうした宗教運動のもと西大寺流律宗の尼寺となつた。西大寺末寺で道明寺と關係深いのが律宗の僧寺の西琳寺である。

こうした状況をみると、道明寺はこれ以前から天神信仰の一つの中心として存在するとともに、幕府とも關係深い西大寺律宗の末寺になることで寺の運営を安定させた。鎌倉時代後期の律宗の影響のもと、天神信仰がより權威づけられ流布されていったことがわかる。

中世における天神信仰は、「天神講式」にみられるように、仏教と密接な關係にあつた。天神講は鎌倉時代初頭から盛んになり、儀礼も整備されその式次第と信仰の趣旨が講式としてまとめられた。現在、道明寺天満宮が所蔵する「天神講式」（33）は後世所蔵品に入つたものであるが、中世の天神講の様子を伝える善本である。

これによれば、天神は十一面觀音と同一とされ、天神を信仰し天神講を営めば諸種の願いが成就されると記されている。また、觀音が天満天神として現れるのは、儒学を広めるためで儒学と仏教の一致も説かれている。天神を信仰すれば、寿命が延び官位昇進もかなうと、現世利益が盛んに説かれているのも特色である。さらに、觀音は即、阿弥陀如来であるとして、天神はすなわち阿弥陀如来であるとしている。これにより、天神を信仰すれば臨終の際には觀音が来迎し、死後は極樂浄土に生まれることができるとしている。儀式の際には、「南無歸命頂礼天満自在天本體觀世音菩薩」といった名号が唱えられていた。

道明寺の本尊は十一面觀世音菩薩であり、天神信仰との習合を体現するものであり、こうした形で道明寺における天神信仰は展開し、人々の崇敬を受けていったのである。

〔参考文献〕

沢博勝「西大寺流による道明寺の「復興」について―道明寺天満宮所蔵の一史料並びに道明寺縁起の検討―」（『ヒストリア』一二七号、一九九〇年）。

『藤井寺市史』第一巻通史編一、古代第七章三節（秋山日出雄）・中世第二章第三節（杉橋隆夫）一九九七年

考古資料から見た道明寺（土師寺）

米田文孝

古代の志紀郡を代表する寺院である道明寺（土師寺）について、土師寺の周辺で実施された発掘調査で確認された遺構や出土遺物などを通じて概観する。『続日本紀』延暦九年（七九〇）十二月三十日の条によると土師氏は四腹あるとされるが、四系統の土師氏の本貫地と推定される地域には巨大な前方後円墳を含む大古墳群が造営されており、古墳時代には土器・埴輪製作はもとより、造墓・喪葬儀礼をはじめとする職掌しやくしやうに関係していたと推定できる。しかし、飛鳥・奈良時代に及んでその足跡を辿ることができるのは河内土師氏のみであり、その本貫地は現在、藤井寺市東部地域（土師の里遺跡）から羽曳野市域（茶山遺跡）に及ぶ広大な範囲が想定されている。この河内土師氏の氏寺である土師寺はわが国でも初期に建立された寺院の一つで、その出土瓦から飛鳥地域に造営された古代寺院と比肩する伽藍を誇っていたと想定されている。

周知のように、道明寺は天正三年（一五七五）に織田信長の高屋城攻めにより灰燼かいじんに帰したが、焼失以前の道明寺の姿を描いたとされる寛文八年（一六六八）写しの旧伽藍図によると、塔・金堂・講堂が南北方向にほぼ一直線に並んでおり、土師寺は四天王寺式の伽藍配置で造営された古代寺院の一つとして漠然と推定されてきた。近年、土師寺の伽藍推定地の周辺で発掘調査が進められているが明確な遺構は検出されておらず、未だその詳細は不明であるといわざるを得ない。

土師寺に関連する明確な痕跡として、現道明寺天満宮が鎮座する台地南端に設けられた石段の南方約八五メートルに、「五重塔跡」と推定される塔心礎と礎石が保存されている。ただし、塔心礎は現在の地点より東側に置かれていたと伝えられ、周辺に配置された礎石も寄せ集めたものであるという。この塔心礎を起点に周辺の状況を見ると、東南方に道を挟んで近接した地点では、旧伽藍図に描かれた石垣や室町期の堂宇跡などが検出され、高句麗系軒丸瓦が出土したことから土師寺の創建年代が七世紀前半に遡る可能性が確認された。しかし、中心伽藍の推定地である塔心礎と台地南端間の道路部では、円筒棺墓や古代・中世の柱穴などが検出されたものの、寺院関連の遺構は確認されなかった。

塔心礎の東側をみると、東南東方向約一二〇メートルの地点で中世期の溝や井戸などが検出された。溝は後述する西側の溝とほぼ平行して掘削されており、その間隔は約二〇〇メートルを測る。東方約六五メートルの地点では「土寺」をはじめとした墨書土器が出土しており、この寺院が土師氏の氏寺である可能性が強まった。また、東北方約七五メートルの地点では七世紀前半に遡る高句麗系軒丸瓦が約一〇点出土しており、この型式を創建瓦と比定できることが判明した。

塔心礎の西側に目を転じると、西方約九五メートルの東高野街道に沿った位置で、土師寺の西側区画溝もしくは東高野街道の側溝と推定できる溝が確認されている。また、西北方約一三〇メートルの寺域隅角部推定地付近では東西方向の溝が確認されており、出土遺物から東側の南北溝と同時期と判断できる。同じく西北方約七〇メートルの地点では基壇上の石組みが検出されている。この地点では埴輪も多量に出土したが、道明寺天満宮が鎮座する台地の南側斜面に造営された埴輪窯の灰原はいばらである可能性がある。このような状況から、塔を東に金堂を西に配置する法起寺式の伽藍配置も想定されるが、塔心礎から西方約六五メートルの西宮が鎮座する地点の発掘調査でも土師寺に関連する明確な遺構を確認できず、その伽藍配置の確定は今後の調査に委ねざるを得ない状況にある。

最後に、出土した土師寺の軒瓦についてみると、創建瓦として七世紀前半に豊浦寺式軒丸瓦や素文軒平瓦を、同じく中葉には垂式を含む西琳寺式軒丸瓦、後半には土師寺式軒丸瓦を採用している。特に、蘇我氏の氏寺（尼寺）として建立された豊浦寺の軒丸瓦は高句麗様式と位置づけられており、大和では他に奥山廃寺や中宮寺などで採用され、河内では飛鳥寺と同範瓦どうはんわを採用している船橋廃寺、衣縫廃寺でも出土しており、土師寺の創建には蘇我氏が関連していることを示唆する。また、これらの瓦が採用された寺院は政権の中心で活躍した有力氏族の氏寺が多いという特徴から、西文氏かむろのみみぢをはじめとした有力氏族との密接な関係を推測させる。

【参考文献】藤井寺市史編さん委員会一九九七『藤井寺市史』第一巻通史編一藤井寺市、藤井寺市史編さん委員会一九八六『藤井寺市史』第三巻史料編一藤井寺市、藤井寺市教育委員会事務局一九八七～二〇〇四『石川流域遺跡群発掘調査報告書』Ⅱ～Ⅸ、藤井寺市教育委員会、三木弘一九九九『土師の里遺跡』大阪府教育委員会ほか。なお、発掘調査の成果については、藤井寺市教育委員会の上田睦氏にご教示を賜った。

道明寺天満宮の儀礼

道明寺天満宮 禰宜 南坊城光興

道明寺天満宮は、明治五年（一八七二）の神仏分界で、神社と寺に分かれるまで尼僧が住持していたように、寺としての性格が強いつころであった。神事という『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』（18）に記されている神輿（みこし）が出るような神賑的なものや、現在まで続く菜種御供大祭（三月二十五日）などが江戸期の神事といえる。

菜種御供大祭は「河内の春事」ともいわれ、田植え前の農家の休日であった。東大阪市の往生院民具供養館の報告書（『民具歳時記―道具とともに―第6集』平成十六年一月三十一日発行）には、道明寺近辺（特に柏原市域）の方は春事という天神さんを思い浮かべることが聞き取り調査で明らかにされている。由来は古く、道真公が九州へ左遷のち、道明寺に住した叔母の覚寿尼公がくちなしで染めた団子を道真公のいる九州に向かつて陰膳（かげぜん）で据えておられ、それを口にする病気が治るとの評判となったことから始まるとされる。現在でもそのくちなしで染めた団子を菜の花とともに神前に供え、授与するのが菜種御供大祭である。団子は氏子が作り、婦人会が丸めるのが恒例となっている。農家の減少とともに、本来の意義が失われつつあることは残念なことである。

さて、当宮でもつとも賑わう祭りという初天神うそかえ祭といえる。文字通り初天神の一月二十五日に行なわれ、神職が一年をかけて手彫りした木彫りのうそ鳥を交換しあう祭りである。「かえましよう、かえましよう」と毎年多くの人が参加するのだが、その中で幸運な人は純金や純銀のうそ鳥と交換となる。これは太宰府天満宮や亀戸天神社、大阪天満宮などで行なわれていたものを明治に入ってから当宮でも始めたものであった。現在のようになつたのは、戦中に途絶えたものを昭和五十二年に復興してからのことである。「うそ」は「鴛」と書き、学問の神様のお遣いの鳥として相応しいといえる。

他にも当宮において行なわれている祭典があるが、紙数の関係もあるので、最後に特殊な神事を紹介しておきたい。毎年五月に行なわれている釋奠（せきでん）である。釋奠とは孔子とその門弟十哲を祀る祭典で、わが国に伝わったのは古く、初見は大

宝元年（七〇一）である。道真公の時代にも釋奠は行なわれ、確認できるだけでも十数点の詩を道真公は詠まれている。その後中世にはあまり行なわれなくなつたが、五代將軍綱吉が元禄四年（一六九一）二月十一日に昌平坂の大成殿で釋奠を行なうなど、江戸幕府が儒教を奨励し、各藩校においても孔子が祀られるようになった。それは四国高松藩においても同じことであった。高松藩の儒者藤澤南岳が藩校に祀られていた孔子像が散逸するのを憂い、自ら払い下げを受け、主宰する泊園書院において祀るようになったのは明治二十一年のことであった。その後明治三十四年になり、泊園出身の南坊城良興が宮司（当時は社司）を務める当宮へ大成殿を建立し、孔子像を祀ることとなったのである。そして地元の名士を中心に釋奠会を結成し、明治三十六年三月三十日に第一回釋奠が行なわれたのであつた。

釋奠の祭典はいまでもなく神式で行なわれる。本来釋奠では牲肉を捧げるといふが、神道においてそうしたことはなく、まして牛がお遣いとされる天満宮において肉を供えることはない。そこで神饌には米、酒、餅、鯉、乾物、野菜、果物、塩、水が供えられる。そして普段の祭典にはないものが祭文の奏上である。南岳に始まりその長男黄鵠、次男黄坡（関西大学初の名誉教授）、石濱純太郎（関西大学名誉教授）、壺井義正氏（関西大学名誉教授）と受け継がれ、現在では長谷川雅樹氏（元関西大学第一高等学校校長）が祭文の奏上を行なっている。

南岳は多くの人に参会してもらい楽しんで帰ってもらいたいとの思いから、釋奠は祭典と講筵（こうぜん）だけでなく、書画家による席上揮毫（きじょう）や寄贈書画の抽選などで当日は楽しめるようにしたのであつた。また、煎茶花月菴流、表千家流、裏千家流のお茶席が花を添え、参会者は酒席をも共にするのである。その南岳の思いは現在にまで受け継がれ、戦時中にも絶えることなく続けられ、途中一年だけ中断があつたのだが、平成十五年には百回を数えた。現在でも釋奠は、その幹事を中心とした釋奠会によつて維持、運営されていることも特筆すべきであろう。神社が普遍的に続くように釋奠も延々と続くことを信じてい。

宝物解説

【伝菅公遺品】

「学問の神」として古くから尊崇をあつめてきた天満宮（天神社）は、全国におよそ一万二千を数え、各社は祭神菅原道真公に関わる宝物をはじめとし、各時代の実力者によって奉納された文化財をも相伝している。また、江戸時代までは神仏混淆であったから、菅公ゆかりの寺院にも関連する文化財が所蔵されている。道明寺天満宮には、他社をしのぐ、あるいは比肩する宝物が数多く伝世している。わけても国宝に指定されている玳瑁装牙櫛や牙笏、銀装革帯など、菅公所用と伝える宝物は、道明寺天満宮のみに伝来してきた、すこぶる貴重な存在であった。菅公由縁の宝物中の白眉として、孤高の風格を誇っている。同社の前身である道明寺が、天正三年（一五七五）に焼失する以前から、こうした菅公遺愛品は伝承されてきているので、かつては現存遺品をはるかにこえる宝物が伝存していたと推測される。

〔伝菅公遺品〕

1 ●白磁円硯 伝菅公遺品 国宝

中国・唐時代 七世紀
径二七・〇 高六・三

唐代の白磁器にみられるような、灰白色の硬い胎土に灰緑色がかった釉薬をかけて焼成した円形の大型硯。もちろん、墨を磨る面にあたる墨堂には、釉薬を掛けていない。台脚部に、先端を花卉状にする装飾脚二十個をめぐらす。惜しいことに下部を欠失している。あるいは圈台付か、獸足であったかもしれない。初唐につくられた伝世の白磁硯として貴重である。なお、制作地としては、中国の南部地方の可能性が指摘されている。

2 ●高士弹琴鏡 伝菅公遺品 国宝

中国・唐時代または平安時代 九世紀

径一四・六

八花形をした銅鑄製の鏡。下方の蓮池から伸びる蓮の葉にのる亀を鈕座とし、上に山岳と雲鶴、左に竹林に琴を弾く人物、右に鳳凰をあらわしている。唐時代に流行した鏡のモチーフだが、本鏡は唐鏡を原型にして型取りをして鑄造したものとと思われる。琴を弾く人物を中国・春秋時代の琴の名手として知られる伯牙とみなし、伯牙弹琴文としてきたが、伯牙と特定する確証はなく、現在は名称を高士弹琴鏡とする。

3 ●玳瑁装牙櫛 伝菅公遺品 国宝

中国・唐時代 九世紀
幅一〇・〇 高八・〇

象牙でつくった挿し櫛。棟の両面に大小七個の花文を彫り、伏彩色技法といって、下に朱や緑の顔料をほどこし、その上から玳瑁をはめ込んでいる。花と花との間には銅線の唐草文と金泥の珠文を配し、峰にも紡錘形を彫り、同じ装飾（伏彩色）をほどこしている。伏彩色は正倉院宝物にしばしば見られる。なお、玳瑁櫛としては、天寶十載（七五二）正月一日、楊貴妃が安祿山に下賜した宝物中に、玳瑁刮舌篋（玳瑁細櫛）が含まれていたことを付記しておきたい。

4 ●銀装革帯 伝菅公遺品 国宝

中国・唐時代 九世紀
巡方の縦三・〇 横三・二

麻の縷り糸を芯にして、表と裏の両側に革を縫い合わせたベルトで、これに銅製鍍銀の巡方（十五個）と留金にあたる鉸具（尾錠）、蛇尾（帯先金具）を装着する。これらの金具は、魚々子地とし、中央に菊座を置き、朱や緑、藍色をさした上に水晶玉を被せる伏彩色技法で装飾する。巡方の文様は、騎馬狩獵人物と一對の鴛鴦（五個）、それぞれ一對の鴛鴦と鹿（四個）、一對の鴛鴦と一頭の鹿（六個）などを浮き彫りであらわしている。革帯とは、朝廷に出仕する際に着用する正服の腰にめぐらす帯で、帯飾りの方形の銚を巡方、円形を丸鞞という。

5 ●犀角柄刀子 伝菅公遺品 国宝

中国・唐時代 九世紀

全長三二・四 身長一四・七

柄を犀の角でつくり、銀の縁金具を嵌め、平造りの刀身を差し込んだ刀子。惜しいことに、刀身は錆びに覆われ、鞘を欠失している。正倉院に伝わる繊細にして巧緻なつくりの刀子と比べて、いささか大ぶりではあるが、平安前期あるいは唐代の刀子の遺例は少なく、その意味でも貴重である。紙が貴重品であったこの時代、木片（木簡）に墨書きしたのだが、何度が削って使用した。前に書かれた文字を削るのに刀子が使われた。

6 ●牙笏 伝菅公遺品 国宝

平安時代 九世紀

長三六・〇 幅五・八 厚〇・七

象牙でつくられた笏。笏とは、公式の行事や神事などに束帯着用の際、官人が右手に持つ細長い板状の威儀を整える具をいうが、もともとは笏の手前（内側）に紙を貼り、備忘のためにメモを書き留める用途として使われた。中国・唐制では、五品以上の者が象牙笏、六品以下が竹木笏と定められ、唐制を踏襲した日本の律令制下でも、牙製の笏はもともと格が高く、五位以上の高官の持物とされた。

7 八稜鏡 伝菅公遺品

径三〇・六（複製）

昌泰四年（九〇一）、道真公が叔母の覚寿尼との離別を惜しみ、本鏡に自らの姿を映し、自像を荒木に刻んだといわれる。菅公遺品のひとつであることから、「八葉御鏡」もしくは「八葉神鏡」とも称される。

延慶三年（一二三〇）、花園天皇に封をされてより、霊元法皇、中御門天皇、孝明天皇が封をされ、現在でも明治天皇の封がされており資料の実際を確認することはできない。複製鏡は開封時に模されたものとされるが、いつの開封時かは詳らかではない。

〔伝菅公遺品付属品〕

8 漆皮箱

平安時代 九世紀

径一九・四 高八・六

伝菅公遺品のうち、彫漆屈輪文合子（9）に高士弹琴鏡（2）が収まるが、さらにその外箱にあたる円形箱。牛や鹿、猪などの獣皮を型に張り込み、乾燥させてから麻布を着せ、漆を塗って仕上げたものを漆皮といい、奈良時代から平安時代の初めにかけて漆器の素地として制作された。正倉院宝物に四十例、法隆寺献納宝物に八例、そのほか四天王寺などの三例を数える程度であるから、この漆皮箱はきわめて貴重な作例といえる。

9 彫漆屈輪文合子

中国・宋時代 十一〜十二世紀

径一六・二 高五・七

伝菅公遺品のうち、高士弹琴鏡（2）を収める木製漆塗りの円形箱で、黒や朱などの彩漆を塗り重ねた漆面を刀で彫る、いわゆる彫漆技法によって屈輪文をあわせている。屈輪とは蕨のような、あるいはメガネ形をした渦文をいい、中国の彫漆器が得意とする。これまで、この作品を彫漆の模倣漆器とみなしてきたのは誤りで、疑いなく中国・宋時代の彫漆器である。X線透過観察では、蓋と身の甲板・底板ともに、この時代の中国漆器の木地にみられる、いわゆるT字形の木地構造および巻胎技法が確認され、そのことを補充してくれた。

10 木瓜紋折敷「三」字紋散蒔絵螺鈿合子

桃山時代 十七世紀

径二〇・〇 高五・八

伝菅公遺品のうち、銀装革帯（4）を収める容器で、合口造りの円形箱。総体を梨子地とし、蓋の中央に大きな桔梗木瓜紋を置き、その周囲に八個の桔梗木瓜紋を配し、蓋表から側面にかけて隅切り折敷に「三」字紋を散らしている。文様は金銀蒔絵と金の付け描き、薄貝（青貝）とであらわしている。折敷「三」字紋

は、享保八年（一七二三）以降、淀藩主であった稲葉家の紋章で、藩主が道明寺を訪れた記録も遺されている。X線透過観察では、曲物の挽き曲げであることが確認された。

11 彫漆屈輪文箱

中国・宋時代 十一～十二世紀

幅一六・八 奥行一一・三 高一・三

伝菅公遺品のうち、玳瑁装牙櫛（3）を収容する容器で、二つの引き出しをもつ長方形の箱。この作例も、これまで屈輪文を木彫りした上に漆を塗った、いわゆる鎌倉彫の技法によって中国の彫漆器を模倣したものとみなされてきたが、これも訂正すべきで、あきらかに中国宋時代の彫漆器であって、その制作された時期も彫漆屈輪文合子（9）とほぼ同じころとみなすべきであろう。

【古絵図】

道明寺天満宮には、寛文八年（一六六八）の旧伽藍図をはじめとして、旧伽藍図・境内図が六点所蔵され、いずれも近世以降の制作である。もともと、（12）にみられるように古代末から中世の景観を描くものもあり、往時の道明寺の伽藍の規模をうかがうことができる。

12 道明寺往古伽藍絵図

縦一三八・四 横一一四・九

寛文十二年（一六七二）七月廿三日の年号が入り、代官辻又右衛門の印が押されている。道明寺の伽藍は、天正三年（一五七五）織田信長による河内侵攻、高屋城攻めで焼失したとされる。なお、兵火にかかった時期を『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』（18）では元龜三年（一五七二）とする。この絵図は江戸時代になつてから、往古最盛期の道明寺を描いたもので、数多くの伽藍が描かれるが、景観の確実な時代は不明である。中心部には山門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍が描かれる。五重塔の存在は『本朝無題詩』に載せられた十一世紀

頃の惟宗孝言の詩に詠まれている。東側の区画には一室・二室・三室以下の房舎が建ち並び、北側には天満宮が描かれ、聖徳太子堂もみえる。

13 道明寺伽藍図

縦一一・五 横八五・〇

天正三年（一五七五）の兵火による焼失後の伽藍を描いたものと考えられる。制作年代は不詳。中心部の塔・金堂・講堂のあった場所は空閑地となり、その被害の大きさがわかる。一室以下の房舎も建て替えられ、役僧屋敷部分の築地塀も取り払われ、境内の様相が大きく変化している。

14 土師神社絵図

明治時代 十九世紀

縦一四五・八 横八三・六

明治初年の神仏分離によって道明寺は寺院である道明寺と土師神社に分かれた。もとの道明寺は現在の道明寺天満宮の位置にあったが、土師神社として神社がこの地に残り、道明寺は西側の地に移転した。明治六年（一八七三）七月十九日の年紀が入り、当時の堺県に提出された絵図の控えであることがわかる。

15 太宰府天満宮絵図

絵図 縦一三七・一 横一三四・〇

貼紙一 縦三六・三 横九・六

貼紙二 縦四四・五 横一八・〇

貼紙三 縦二五・三 横一七・〇

絵図裏には貼紙が三紙あり、二番目の貼紙には、

筑前国宰府天満宮天見山安樂寺廟院縁図

河内国連土山道明寺天満宮奉納所也

元禄三辛未年九月十七日

とあり、元禄四年（一六九二）奉納されたことがわかり、この後に奉納者、菅大僧都大鳥居信祐の名がみえる。絵図には大池にかかる過去・現在・未来の橋、そ

の奥の天満宮社殿別当寺安楽寺などが描かれている。

【絵画】

〔天神縁起〕

天神信仰の隆盛によつて各地で「天神縁起」が作られた。天神縁起は菅公が神格化される過程を説くもので、京都・北野天満宮蔵「北野天神縁起絵巻」が現存最古の「天神縁起」として名高い。多くの「天神縁起」は、縁起の後半に所蔵社の草創や由縁を付すものも多く、近世に至るまで数多くの作品が制作された。

16 ○天神縁起絵扇面貼交屏風 藤井寺市指定文化財

室町時代 十六世紀
屏風 各縦一五六・六 横三六〇・〇
扇面 各縦一九三 横四九七

扇面六十枚に描かれた天神縁起で、扇面形式の天神縁起絵は唯一の作品である。また「紅梅殿別離」「土師里で覚寿尼との別離」など独自の場面を含む六十場面は天神縁起絵諸本中、最も場面数が多い作品としても注目される。扇面の形を生かした画面構成で、十六世紀前半、土佐派の特徴をよく示しているが、金雲を用いた場面や雲母引きとした場面もあるなどその技法に多少の違いが認められる。

17 天神之縁起

江戸時代 十七世紀
上巻 天地三四・六 総長一五〇・六・九
中巻 天地三四・六 総長一四二・四・〇
下巻 天地三四・六 総長一三八・九・〇

絵・詞ことばからなる三巻本の天神縁起である。絵は控えめな色づかいで上下の罫線にとらわれず、また余白も多く設けるなどおらかな画面で物語が進行する。添状と第三巻巻末の奥書によれば、当地の領主であった三好丹後守房長が筑紫へ下向した折、太宰府天満宮所蔵の天神縁起を写し、武運長久などを祈願して慶長

十四年（一六〇九）に寄進したものであることが記されている。この頃に社殿造営が竣工しており、近世当宮の記念碑ともいべき作品である。

〔道明寺縁起〕

18 河州志紀郡土師村道明尼律寺記

上巻 天地三二・四 総長七二〇・七
中巻 天地三二・四 総長一三二八・九
下巻 天地三二・四 総長二一四八・九

道明寺の草創期からの歴史を語る三巻本の絵巻。奥書に「天正七己卯年二月廿五日」とあるが、この時期に作成されたのではなく、享保十一年（一七二六）に書かれたものとする説もある（秋山日出雄「道明寺縁起の成立過程」『藤井寺市史紀要』第一号、一九八〇年）。天正七年の年号が何故入れられたのかは不詳。聖徳太子による尼寺としての開創からはじまり、菅原道真の叔母にあたる覚寿尼の入寺、菅原道真による十一面観音像の制作などを記す。記事は、戦国時代の道明寺の荒廢、天正三年（一五七五）以降の復興までを記している。

〔東帯天神像〕

天神信仰の隆盛によつてさまざまな天神画像が生まれた。なかでも朝廷での正装である東帯を着した「東帯天神像」がよく知られている。眼を見開き、唇を嚙む表情は怒りを露あらわにし「怒り天神」とも称された。「東帯天神像」はその後の天神画像の基本形となり、当初、背景は無地で上部に菅公の略歴を記した色紙形しみがたを添えていたが、次第に敷物や背景が添えられるようになる。

19 東帯天神像 大岡春卜筆

江戸時代 十八世紀
縦一六九・五 横九三・六

近世大坂画壇の重鎮である大岡春卜が寛保元年（一七四一）に描いた東帯天神像で、上置座あげだまの上に褥しじふを敷いて右向きに坐している。背景には何も描かれておら

ず、また春卜をはじめとする多数の願主によるものであることから特殊な制作事情をうかがわせる。

20 東帯天神像

縦七四・六 横三六・四

本作品は当宮では「伝菅公筆」と伝えられており、また、柳の枝で描いたときれることから「楊枝の御影」とよばれる。当宮所蔵の天神画像で最も古い東帯天神像である。東帯姿で小紋高麗縁の上畳に坐し、笏の上を握った右手も力が込められており、やや丸みを帯びた顔にも怒りの表情がみて取れる。画面左側から覆いかぶさるように梅枝が伸びている。

〔渡唐天神像〕

天神像のうち、中国の仙冠・道服をまとい梅の枝を手にして立つ渡唐天神像は異色の存在といえ、天神（菅公）が中国禅宗の名僧、無準師範に参じ、一夜にして印可を得て法衣を授けられたという逸話に基づいて制作された。荒唐無稽とも思える逸話は詩禅一致を目指す五山の禅僧による創作であるが、外来思想である禅を日本に根づかせ、日本化させるという背景があった。当宮は数多くの渡唐天神像を所蔵している。

21 渡唐天神像

縦七六・三 横二四・二

雪舟筆と伝えられる、真正面を向き、紅梅の枝を持った渡唐天神像で、法衣の赤い縁取りが印象的である。ほぼ左右対称に描かれた姿は本作品が礼拝像として描かれたことを暗示している。上部には禮才による賛文が記されている。禮才は、室町時代の臨濟僧で東福寺および南禅寺の住職を務めた愚極の諱である。

22 渡唐天神像 伝狩野之信筆

縦八二・七 横三三・九

安土・桃山時代の狩野派の画家で、狩野元信の弟である狩野之信による制作と伝えられている。本作品もやや薄青い道服を着し、正面を見据えた姿で白梅の枝をとっている。上部に長文の賛文をしたためる。

23 渡唐天神像 近衛信尹筆

安土桃山〜江戸時代 十六〜十七世紀

縦九三・五 横四三・四

渡唐天神像のバリエーションのひとつである「天神」と草書体で表した文字絵の天神像で、寛永の三筆とよばれる近衛信尹によって描かれた。上部には「唐衣折らで北野の神ぞとは袖にもちたる梅にても知れ」との歌が添えられる。近衛信尹は、三藐院と号し、文字絵天神像を百幅描いたと伝えられている。

24 渡唐天神像 仙厓筆

江戸時代 十八〜十九世紀

縦六六・三 横二九・〇

動きのある速筆で描かれたユーモラスな渡唐天神像で、上部には歌が添えられている。画面左に「仙厓」の朱文小判印が押されている。臨濟宗妙心寺派の禅僧である仙厓義梵（一七五〇〜一八三七）は、軽妙洒脱で親しみやすい禅画をよくしたことで知られる。

25 渡唐天神像 明正天皇筆

江戸時代 十七世紀

縦二七・三 横一七・二

画幅右下端に朱の菊印が押されており、後水尾天皇の第二皇女である明正天皇筆と伝える。肥瘦、濃淡のある筆勢で渡唐天神の輪郭を描き、部分的に薄墨をさしているが、天神像の表情はあくまでも柔らかく飄々たる印象を受ける。明正天皇は外祖父を徳川秀忠、伯父を家光とする女帝であったこともあってか、掛軸の一字は葵紋である。

26 渡唐天神像 柳澤淇園筆

縦六三・一 横一九・五

画幅中央上部に赤い大円を描き、そのなかに飛雲に乗った渡唐天神を金泥で描いた作品。画面下に「寛延四辛未正月（一七五二）の年紀と「淇園主人」の落款、「柳澤」「公美」の印章がある。柳澤淇園（一七〇四〜一七五八）は、大和郡山藩の重臣で、池大雅を指導した初期南画家としても知られ、書、茶道などをよくした多才な風流人として知られる。日輪を思わせる赤の大円に出現する渡唐天神を金で描いた単純な構図が逆に存在感を深めている。

〔近世絵画〕

道真公由来の遺品を所蔵し、人形浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』の舞台ともなった道明寺天満宮は、近世から近代にかけての絵画作品を数多く所蔵している。なかでも近年研究が進んでいるいわゆる大坂画壇を代表する画家の作品を多く含んでいることは、当宮と大坂との深い関わりを示すものとして注目される。

27 伏見桃山図 岡熊嶽筆

江戸時代 十八〜十九世紀

縦一一五・〇 横四〇・〇

伏見桃山の桃花を楽しむ情景を柔らかな筆法で描いた作品。岡熊嶽（一七六二〜一八三三）は福原五岳に画を学んだ後に諸流派の画法を独学し、独自の画風をなした大坂の画家。画面上部の款記によると、同門の林園苑の伏見桃山図を模写したことが記されている。岡熊嶽が描いた同一の作品が関西大学図書館に所蔵されるほか、本図のもととなった林園苑「伏見桃山図」（個人蔵）の存在も指摘されている。大坂画壇の絵画学習の一端を示す好例である。

28 立雛図 伝円山応挙筆

縦八八・四 横二五・四

両手をぴんと伸ばし、藤・梅花などの模様をあしらった衣と花模様の袴をはいた雄雛と、雄雛と同模様の着物をまもって傍らに立つ雌雛を描いた立雛図。立雛

図は女兒の成長を祝う三月三日の桃の節供にかけられ、近世以後、多くの画家たちによってさまざまな立雛図が描かれたが、本図もその典型的な立雛図のひとつ。色鮮やかな着物と微笑を浮かべた表情がなんとも愛らしい。右下に「應挙写」の落款と「應挙之印」（白文方印）が認められる。

29 老梅図衝立 森一鳳筆

江戸時代 十九世紀

縦一四四・〇 横九一・八

横に捻じ曲がって伸びる老梅の樹幹を墨、金彩で描いた堂々とした作品。作者の森一鳳（一七九八〜一八七一）は、森徹山の養子となった円山派の画家で、大坂で活躍した。円山派のスタイルに洒脱な造形を加味した作品を制作している。特に一鳳が描いた「藻刈図」は「藻刈る一鳳」、すなわち「儲かる一方」と大坂の商家の間でもてはやされた。本図でも老梅の根元や刺げとげしい枝振りなどの描写に軽妙な感覚がよく表れている。

〔近代絵画〕

近代に入っても当宮は、大阪市中と深い関係を保ち続けた。特に漢学者藤澤東畷の長男で高松藩に仕えた儒者藤澤南岳は、当宮に大成殿が建てられた際、私塾泊園書院に安置していた高松松平藩藩校由来の孔子像を寄贈して釋奠を復活させた。また、石柱の揮毫も行なうなど、当宮と深い繋がりが認められる。当宮の近代絵画もまた当時の近代大阪の隆盛を示すにふさわしい作品群である。

30 神楽舞図 菅楯彦筆

昭和時代 二十世紀

縦九二・二 横二七・五

提燈が張られたもと、鼓を打ち、銅拍子を叩く楽人の前で神楽を舞う巫女が軽い筆致で軽妙に描かれた作品。菅楯彦（一八七八〜一九六三）は、鳥取県倉吉出身ながら大阪で長く活躍した画家で、本作品にみられるように「浪速御民」と称した。四天王寺の舞の舞楽を復興するなど大阪の祭礼復興に尽力し、大阪名誉市

民第一号に選定されている。洒脱に描かれた作品の右上部には菅楯彦自身による祝詞のりとに似た古歌が添えられている。

31 初午図 生田花朝筆

昭和時代 二十世紀
縦二三・七 横二六・八

紅白に咲きほこった梅枝のもと、初午はつごまの太鼓をたたく子供を描いた作品で、華やかな色づかいでほのぼのとした情景を描いている。生田花朝いくたからちよう（一八八九～一九七八）は、大阪生まれの閨秀けいしゆう画家で、漢学を藤澤南岳の次男藤澤黄坡こうは（章次郎）に学んでいる。一九二六年、船渡御ふなとぎみの様子を描いた「浪花天神祭」が帝展で特選となる。優しい色づかいに包まれた無垢な子供の大らかな画面からは、古きよき時代がしのばれる。

【古文書・書跡】

〔古文書・古記録〕

道明寺天満宮には、年末詳十月十九日付の松永久秀書状（34）、天正元年（一五七三）佐久間信盛禁制をはじめ十六世紀後半以降の古文書が現存する。これ以前の中世文書は戦火で焼失したと考えられる。鏝阿置文はんあぢぶん（32）は延慶三年（一二二〇）六月一日付の文書であるが、この文書は元禄十年（一六九七）河内国古市郡西琳寺よりもたらされたものである。その他、近世・近代文書が約三百点現存する。また古記録類については縁起類など天神信仰に関わるものが注目される。

32 鏝阿置文

鎌倉時代 十四世紀
縦三三・四 横五二・一

延慶三年（一二二〇）六月一日付で西琳寺僧鏝阿が記した置文。当時、道明寺

蔵の鏡は菅原道真が日々手にして毎朝姿を映した品として知られ、これを数多くの人びとが結縁けちえんと称して手で触れていたことがわかる。こうした菅原道真（天神）への信仰者の行ないによって、鏡が汚損していくことを嘆き、鏡を封印し容易に触れることができないようにすることを定めている。

33 天神講式

天地三三・五

天神講の次第を記したもの。天神講は元久元年（一二〇四）夏、京都北郊ではじめられ、毎月十八日に菅原道真の廟前で行なわれるのを常とした。奥書には

本云、

大蔵卿為長卿草也、依承信法印詵草之云々、長成卿書賜之、于今建長六年閏五月、

延文元年七月廿二日依安樂寺別当長玄大僧都所望、以長成卿自筆本書写之

（別筆）

尊円親王真翰無礙、尤可謂至宝也、桑門堯空記

とあり、もとの本は曼殊院別当承信の草稿を菅原為長が記し、建長六年（一二五四）閏五月、菅原長成（為長の男）がこれを筆写した。これがさらに、延文元年（一二五〇）、安樂寺別当長玄の願いで書写本が作成された。後世、三条西実隆が、この筆は尊円親王筆としている。尊円は伏見天皇皇子で青蓮院門跡もんせき、天台座主ざすを務め、名筆で知られた。三条西実隆は戦国時代の公家で、古典・仏典に通じた。

34 松永久秀書状

戦国時代 十六世紀
縦一三・二 横三九・八

就道明寺領之儀、

示給候在来姿、

定不可有御別儀候、

御上使衆へも御理

可然存候、恐々謹言、

松少弼

十月十九日

久秀(花押)

三向

御返報

松永久秀から三好長逸へ出された文書。道明寺領についてこれまで通り、所領の知行を安堵したもので、上使への徹底を申し入れている。年代は三好長慶が河内へ入国した永禄三年(一五六〇)六月以降、三好三人衆と松永久秀の同盟が破れる永禄八年(一五六五)十一月までの間と考えられる。

35 織田信長朱印状

安土・桃山時代 十六世紀

縦一四・一 横四五・九

(異筆)

「のふなか殿、御しゆいん」

当寺事、今

度放火無是非

次第也、所詮各

早速可令歸寺、

当知行等聊不

可有相違候也、仍

状如件、

天正參

十一月九日(朱印)

道明寺

織田信長によって、道明寺の所領安堵がなされたもの。信長の高屋城攻めの最中に道明寺が軍兵によって放火されたことがわかり、これを是非なくとし、尼僧達が寺に戻るよう命じている。

36 丹羽長秀判物

安土・桃山時代 十六世紀

縦一四・一 横三九・五

当寺之事、先年

被成 御朱印候、就

其従三七様御

書候、拙者事、任

右之旨、向後之儀、

聊不可有疎意候、恐々

謹言、

天正十

六月六日

長秀(花押)

惟住五郎左衛門尉

道明寺中

惟住(丹羽)長秀が、織田信孝の意を奉じ、信長の朱印状にしたがい道明寺領を安堵した文書。天正十年(一五八二)六月六日は本能寺の変から四日後で、長秀は織田信孝を奉じて明智光秀の女婿、織田信澄を大坂城に攻め、大坂近郊を支配下においた。

37 豊臣秀吉判物

安土・桃山時代 十六世紀

縦一四・七 横四五・三

(異筆)

「秀吉様」

河州志紀郡内

当寺領百石事、

寺納不可有相違

所、如件、

天正十一

八月十二日 秀吉(花押)

道明寺

38 豊臣秀吉朱印状

安土・桃山時代 十六世紀

縦二三・四 横六二・〇

〔異筆〕

「御しゆいん

たいかう様」

河内国志紀郡

道明寺内百七拾

四石式斗事、以今度

検地之上、令寄進之

訖、可全寺納候也、

文禄三

十二月二日（朱印）

道明寺

天正十一年には百石の寺領が安堵されたが、その後の太閤検地により所領が確定され、豊臣秀吉から道明寺に百七十四石二斗が寄進された。こうして道明寺村が一円支配下におかれた。

39 徳川家康禁制

江戸時代 十七世紀

縦四六・八 横六九・〇

〔端裏書〕

「制札 河内国

道明寺」

禁制 道明寺

一 軍勢甲乙人等、濫妨狼藉事

一 放火之事

一 山林竹木伐採事

付人馬取事

右条々堅令停止訖、若於違犯之輩者、

速可処嚴科者也、仍下知如件、

（朱印）慶長五年九月廿一日

徳川家康が道明寺へ軍勢などの乱暴狼藉や放火、山林竹木の伐採、人馬を徴用することを禁じたもの。同日付けで福島政則・池田輝政連署の禁制が出されている。

40 切支丹制札

江戸時代 十八世紀

縦五〇・〇 横一三三・五

正徳元年（一七一二）五月に幕府より出された切支丹禁制。密告を奨励し、バテレンを訴え出た者には銀五百枚を与えるなどの規定が明示された。また、隠し置いた場合は、その所の名主・五人組とも一類は罪科に処せられるとしている。

〔書跡〕

41 七言絶句三首 貫名海屋筆

江戸時代 十九世紀

縦一三二・二 横六一・〇

嘉永五年（一八五二）、北野天満宮における菅原道真の没後九百五十年祭に際して、幕末の三筆の一人である貫名海屋（ぬきなうかく）（一七七八〜一八六三）によつて書かれた七言絶句三首である。箱書によると鳩居堂と思われる熊谷氏に渡し、さらに住友保丸が所蔵した後、貫名海屋の収集・研究家であった書家の山下是臣氏の所蔵となり、昭和五十九年の梅花祭に当宮へ寄贈された。貫名海屋の作品のなかでも制作動機、所蔵事情が明確にできる優品である。

42 惟宗孝言詩軸 契沖筆

江戸時代 十七世紀
縦二九・六 横四三・三

延久年間（一〇六九〜一〇七四）の大外記であった惟宗孝言が道明寺を通った時に詠んだ詩を、江戸時代の国学者であった僧契沖（一六四〇〜一七〇二）が書写した作品である。料紙は雲母摺りで、金泥木版による草花文様を摺り、切箔などを添えた豪華なものである。詩によれば、道明寺には五重塔がそびえ、黄昏時には鐘がならされたこと、また檀越は道真であったことなどが記されている。

43 七言絶句 藤澤南岳筆

明治時代 二十世紀
縦四五・〇 横五六・九

藤澤南岳が明治三十五年（一九〇二）三月に書いた七言絶句である。当宮の釋奠は現在、五月上旬に行なわれているが、森隆太・満代氏の研究によれば、船田船岳の日記（明治三十六年三月三十日）に「道明寺天満宮社内ニ於ケル釋奠ニ来拜ス 藤澤南岳先生父子其他老人家ノ来會スルモノ多シ 式後席上揮毫常アリ」とあって、釋奠が三月末に行われたこと、式後に各士による揮毫があつたことを伝えており、本作品も明治三十五年の釋奠の時に揮毫されたものと思われる。

【文芸資料】

44 菅家文章 長有筆

江戸時代 十七世紀
天地三三・九

菅家文章は道真公が昌泰三年（九〇〇）に醍醐天皇の求めに応じ、献じた漢詩文集十二巻。これを見た天皇は「菅家の詩は白楽天の詩よりも秀れている」と称えた。

本書は、万治二年（一六五九）九月二十五日に、道明寺内に存した東福院の長

有が書写し、奉納したもの。中世以前に書写されたものは確認されておらず、書写本としては古いもののひとつである。

45 新撰万葉集

江戸時代 十七世紀
天地三四・〇

道真公が撰んだとされる詩歌集で、「菅家万葉集」とも称される。上下二巻に四季と恋に分類された和歌を真名書きに記し、それらを意識した七言絶句を載せている。

奥書によると、万治二年（一六五九）極月（十二月）中旬に、道明寺天満宮へ奉納するために書写され、奉納されたことがわかるが、奉納者、書写者ともに不明である。

46 瑠璃壺之詠歌百首 帽山元賢筆

江戸時代 十八世紀
天地一九・六

瑠璃壺とは、道真公が心に適う和歌の草稿を瑠璃の器に納めていたということに由来しており、数多い天神仮託歌集の内、百首歌の一種に相当する。

これは享保十三年（一七二八）三月二十五日に、河内国一宮枚岡神社の神宮寺である、金龍山神護禪寺の黄檗僧帽山元賢が書写奉納した一軸。当宮は『瑠璃壺』と題する資料を他に三点蔵している。

47 河州土師村道明尼律寺記録

縦二七・二 横二〇・七

本書は平成十五年七月、当宮の蔵より発見された。『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』（18）から採録された草創からの縁起より、天明六年（一七八六）の記述まで続く。七十二丁に記されるが、残り四丁が白紙のままであることから、編纂途中であつたと思われる。

内容は、正徳六年（一七一六）の洪水からの復興や三井家や鴻池家との繋がり、

奉納品の来歴など、享保年間頃より天明六年までの記録が詳細で、近世中期の道明寺・道明寺天満宮を知る上で重要な資料といえる。

【工芸品】

48 ◎笹散時絵鏡箱 重要文化財

鎌倉～南北朝時代 十四世紀
径二三・一 高六・三

合口部に錫縁をめぐらした円形の鏡箱。総体を黒漆塗りとし、そこに淡い金粉を蒔く。中央に太い帯状の三引文を、その左右に笹竹の折枝文を配し、蓋の裏と身の側面には笹竹を、箱の底には三引文をあしらう円文を散らしている。これらの文様が金の研ぎ出し時絵であらわされている。この鏡箱には、同じ時期の制作とみなされる白銅鏡（49）が納置されるのだが、鏡箱の上部に二個の吊り環があるので、鏡が御正体として祀られていたことがわかる。

49 ◎笹散双雀鏡 重要文化財

鎌倉～南北朝時代 十四世紀
径一九・八 縁高〇・六五 縁幅〇・五

白銅（錫分の多い青銅）製の円鏡。鏡背は、円い界線で内外二区にわけ、さらに中央の帯状の三引文で上下二区にわけ、各区内には、笹竹の折枝文を散らし、上方にだけ飛び交う二羽の雀をあらわしている。鏡面には、蓮台上に胎蔵界大日如来の種子である梵字「阿」字を金泥で描いており、明らかに鏡像としてしつらえられたことがうかがえる。なお、鏡箱（48）の笹竹にくらべて、動きのある表現となっている。

50 唐石梅竹硯

朝鮮時代 十八世紀
縦二一・五 横一一・五 厚一・七

墨池を瓢箪形、つまり日月に彫り、周囲に梅と竹とを細密に彫った、いわゆる

硯。原材は、平安南道産の渭原石と考えられる。おそらく朝鮮通信使を通じて日本にもたらされたものと考えられ、こうした硯は、国内と朝鮮をあわせても十例ほどを数えるだけで、それだけに貴重な硯である。この硯には、五條式部大輔菅（原）為範卿の極書きが添付し、延享三年（一七四六）、桜町天皇から下賜された旨が認められている。

51 硯

縦四三・〇 横二四・四 厚三・六

硯唇が厚い大型の硯で、六角形の形態も珍しい。硯にあわせてつくられた櫛材の台とも調和している。近世の『河州土師村道明尼律寺記録』（47）に、延享三年（一七四六）、京都の四条で宝物の開帳が行なわれたとき宮中で桜町天皇の上覧があり、その際、大硯の寄付があり、その書付もあると記されている。この硯がそれに相当すると思われる、伝存している書付には赤間石の道風型硯であると記されている。

52 漆塗箱

南北朝時代 十四世紀
縦六三・五 横一〇・〇

箱の蓋・身ともに全面に布着せし、外側を黒漆、内側を朱漆塗りとする、いわゆる内朱外黒の箱。蓋の短側面には、それぞれ「御影」「道明寺」、身の底面には「道明寺 正平廿二年丁未二月廿五日 願主橘正武」の朱漆銘がある。橘正武は、楠氏一族で、南北朝時代の武将和田泉守正武と考えられる。梅鉢に切り形の紐金具がつき、その魚々子地文は和田正武の時代にほぼ合致する。

53 ○脇差 銘 秀光 大阪府指定文化財

南北朝～室町時代 十四～十五世紀
刃長三五・七 莖長一〇・二 反り〇・四 刀身元幅二・三

秀光は備前国長船で活躍した「小反物」と呼ばれる一派の刀工。貞治から応永にかけての年記が確認されることから、南北朝から室町初期にかけて同名数代続

いたとみられる。寛政九年（一七九七）刊の『懷宝劍尺』では、切れ味が最も鋭い「最上大業物」にあげられた。この脇差は平造りで重ね薄く、刃部が長く、反りのついた「寸延び短刀」形式で、南北朝から室町初期にかけての典型的な刀姿。刃文は、のたれに小互の目乱れ交じり、小沸つき、砂流しかかる。「天満大自在天神」の神号や、俱利伽羅龍に珍しく梅枝を添えた刀身彫刻から、奉納のために注文打ちされた可能性がある。昭和五十六年に大阪府指定有形文化財に指定。

54 劍

総長六一・四 刃長四九・五 茎長一一・九

刀身元幅一・九 刀身先幅一・四

劍は両鑄造りで、表裏とも鑄筋に樋を彫る。地鉄は板目、刃文は小沸出来の直刃で匂口締る。現存する劍の中では比較的寸法が長く、刃部の長さに対して茎が短いのが特徴である。現在は劍身のみだが、もとは三鉾柄劍であったと思われる。

55 三鉾柄劍

総長四三・七 刃長二五・七 全幅四・五

刀身元幅一・三 刀身先幅二・二（鞘長三九・四）

三鉾柄劍は、両鑄造りの刀身と、鉄製の三鉾柄が一体となった珍しい共鉄造りである。板目肌地鉄に、細直刃の刃文を焼く。鞘は黒漆塗に俱利伽羅龍を高時絵し、鞘口に菊紋・桐紋を金時絵で表わす。附属する黒漆塗劍箱には、「後醍醐天皇繪旨劔 行平作」と記され、柄の両面（劍側の鉾の根元に不鮮明ながら「行」、「平」と銘らしき彫が確認できる。中世に行平を名乗る刀工では、鎌倉時代初期の豊後国行平が著名であるが、この劍の銘とは字体が異なる。寛政四年刊の『古刀銘盡大全』の挿図の説明には、「後醍醐天皇元徳或建武ノ頃好テ造セラル、モノカ（中略）刀鍛冶ニアラザルモノカ」とある。

56 天盃

江戸時代 十八世紀

径一一・六

全面に金泥をほどこした土器の盃で、見込みの中央に「寿」字を陽刻している。これを収める木箱の蓋裏には、「蓋此御土器者忝 太上皇之御祝儀之節 菅黄門長義卿 天盃御頂戴之御土器也 是度浪華靈廟奉納之神輿殿御額并万歳幡御持参 為入 御一覽御祝儀 長義卿於雉御館以此御土器被 御盃下賜則直被遣之由 嚴命拜受之 于時享保廿一年春三月十有七日已下刻也 竹下姓忠国（花押）」の墨書銘があり、太上皇すなわち桜町天皇から菅長義卿に下賜された盃であることが記されている。なお、『公卿補任』によれば、江戸時代の菅原家は六家を数える。

57 瑠璃壺

全高一九・八 台径一五・五

重高七・二 径六・五

宇多天皇の信任を得て参議となり、醍醐天皇のときに右大臣に昇進した菅原道真は、昌泰四年（九〇一）、藤原時平の讒言によって大宰権帥に左遷となる。天正七（一五七九）己卯二月廿五日の奥付けをもつ『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』（18）があり（外題を『道明寺記贍』、内題を『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』とする）、それによれば、延喜三年二月、菅公が配所の大宰府にて没すると、その亡骸は安楽寺に葬られた。その後、道明寺にいる菅公の叔母覺寿尼のもとに、菅公の遺告として、安楽寺権僧都から菅公の形見物がおくられてきた。その中に瑠璃壺があった。絵巻には「是ハ宰府におもむきたまひし時、宇佐（現大分県宇佐市）のほとりにて龍女出現して、丞相に奉りしとなん、いひ伝へ侍りぬ」と記している。なお、台座の底裏に「元文庚申三月／吉祥日／瑠璃之壺／臺外家／願主天野通醫／栗生与三兵衛」の彫銘がある。

58 五鈴鈴

縦一四・五 鈴部径五・八

『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』（18）によれば、延喜三年（九〇三）、菅原道真が配流地の太宰府にて身罷ったのち、大宰府安楽寺の権僧都から道明寺の覺寿尼のもとに、菅公の形見として阿弥陀経、般若心経、五股鈴、石帯、櫛笥、八

葉鏡、笏、宝劔などが届けられた。その五股鈴こそ、本作例ではないかと伝える。鈴身部の上部に連珠文をめぐらすほかは、紐帯もない素文鈴で、杵部の最下部に連弁をめぐらしている。鈴身部の上につく杵部は、何らかの事情で欠失したらしく、中鉢・脇鉢からなる鉢部、連弁帯・鬼目をあらわしている把部をあわせた杵部は、木製で復元された後補である。なお、当宮では松虫鈴と通称している。

59 本殿

江戸時代 十八世紀

中央に菅原道真公を、左座に遠祖天穗日命、右座に覚寿尼公の三柱を祀る本殿は、延享年間に再建された権現造の建築で、偉観を誇っている。本殿扉の前には、数多くの漆塗り四方衝重と、その上に錫製の瓶子と器台が供えられている。その中には、奉納者と奉納年月を記すものが少なくなく、これまで篤い信仰をあつめてきた歴史のごく一端がうかがわれる。60・61の寛保四年（一七四四）と宝暦六年（一七五六）に三井家から奉納されたものを筆頭に、たとえば嘉永四年（一八五二）の神梅講、安政六年（一八五九）の左海紅梅講などの講中からのほか、明治三年（一八七〇）には、日本橋二丁目の塩屋藤八、まさ、藤治郎、米治郎の個人レベルからも奉納されている。朱漆梅鉢文金時絵四方を奉納寄進した西嶋喜右衛門は、石造狛犬の台座に刻された元文三年銘文中にもみられる。

延宝二年（一六七四）と正徳六年（一七二六）の水害により、天満宮の前身にあたる道明寺は潰滅的な被害を受けた。その再興費用を捻出するための、天神十万人講の組織づくりと霊宝開帳を行なった。享保九年（一七二四）に当地での開帳について、同十九年（一七三四）に京都の四条道場、元文五年（一七四〇）には大坂で出開帳を行なっている。三井家との関係は、京都の出開帳がきっかけとなり生まれた。その際、三井八郎右衛門高方が「菅公木像」を寄進した縁により、高方は元文元年（一七三六）、境内に三井家の先祖代々の回向供養として得宝院を建立し、これを寄進したとされている。これ以後、三井家からの経済的援助があった。

60 四方衝重

江戸時代 十八世紀

縦三・六 横三三・六 高三三・三

総体を黒漆塗りとし、松竹梅と梅鉢文を、しかも内側までにも金の薄高時絵であらわし、錫製の瓶子にも同じ意匠を同技法でほどこしている。竹笹のある土坡からのびる松と梅の構図といい、金時絵の技法といい、なかなかすぐれている。内側の甲板裏に「寛保四甲子歳（一七四四）正月吉祥日」と、台脚部の内側に「願主 三井八郎右衛門高美」の金時絵銘がある。三井高利を創業者とし、越後屋呉服店と両替商を営み江戸時代の豪商として有名な三井家は、高利の長男高平以後、惣領家は代々にわたって八郎右衛門を通称とした。

61 四方衝重

江戸時代 十八世紀

縦三二・二 横三三・二 高二八・二

総体を朱漆塗りとし、梅鉢文を金と銀の時絵であらわし、それらを随所に散らしている。台部の裏にも同じ意匠をほどこしており、いかに丹精をこめてつくられたかがうかがわれる。錫製の瓶子にも梅鉢文を金時絵であらわしている。甲板の裏に「宝暦六年（一七五六）丙子九月吉日」、また台脚部の裏に「願主 三井八郎右衛門高彌」の漆銘がほどこされており、奉納の年月と奉納者名を明らかにして貴重である。

62 瓶子

江戸時代 十九世紀

右 口径五・七×五・八 腹径一〇・五×一〇・四 底径一〇・三×一〇・四 高二四・〇

左 口径五・八×五・六 腹径一〇・五×一〇・五 底径一〇・三×一〇・三 高二四・〇

細身の瓶子型をした錫製の神酒徳利一对で、胴部中央に梅鉢文を金時絵であらわし、底面に「大坂／錫喜」の刻印が押される。漆塗高杯大小、漆塗金時絵四方と一式を成し、四方脚台裏面の朱書から、嘉永四年（一八五二）に「施主人／松村齋女／同貞女／同平三郎／同千鶴女」により献納されたことがわかる。錫器は

大坂の特産品として知られるが製造地と年代の判明するものは少なく、本資料は江戸時代の大坂鋳器を知る上で貴重な資料である。

63 宝珠型水器

口径一三・〇 腹径二四・〇 底径一四・〇 高二七・〇

神前に水を供える容器で、道明寺天満宮では水器すいきと称される。やや扁平な宝珠の形をした錫製合子で、黒漆塗金箔押しくろしつぬきばうしの八脚案に載せる。腹部正面に梅鉢文を金泥で描くほか、円錐形に反りあがった蓋のつまみにも金泥を塗って飾る。底部に「すゞや／半兵衛」の刻印が押されるが、同家は正徳四年（一七一四）の創業と伝え、文政三年（一八二〇）の『商人買物独案内』に紹介される大坂心齋橋筋の錫道具屋で、昭和期まで営業を続けた。

64 金銅製舍利器

径九・二 上径五・七 下径九・八

平安時代末期から舍利器が登場し、このような蓮台型では唐招提寺に所蔵されている鎌倉時代の遺品が知られている。蓮肉の中に数粒の舍利を納め、上部にガラス板をはめ込んでいる。中世末期ごろの制作と考えられるが確定できない。社伝等は認められないが、天正七年（一五七九）の奥書をもつ『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』（18）に、道真が九州へ左遷されるとき道明寺を訪れて、叔母の覚寿尼に形見として仏舍利五粒を渡したとある。

65 「太宰府天神」字芦屋釜

口径一七・七 胴径二七・〇 高さ二二・六

『河州土師村道明尼律寺記録』（47）によれば、この釜は宝暦二年（一七五二）、道明寺草創八五〇年を記念して泉州堺の常楽寺にて開帳されたことがわかり、「芦屋古作太宰府文字かま」とある。肩部に「太宰府天神」と陽鑄されている。羽の部分はが打ち落とされた「羽落ち」がみられる。なお、芦屋釜は筑前国芦屋（福岡県遠賀郡芦屋町）でつくられた釜のことで、室町時代には下野国佐野庄天明（栃木県佐野市）でつくられた天明釜と並び賞された。芦屋釜の製作技術で特徴的な

のが「挽ひき中子なかこ技法」であるといわれている。

66 青銅製狛犬

江戸時代 十八世紀

(右) 像高一二五・〇

(左) 像高一〇五・〇

拜殿前に置かれた狛犬一対で、尻尾に「大坂住／大谷相模掾」と陰刻される。大谷相模掾は高津に工房を構え、鐘などの大型青銅製品に名を残す鑄工として名高い。石製台座には「取次／二之室／元文三戌午歳／正月吉日／大坂北濱式丁目／願主／西嶋藤右衛門」の銘がある。大阪府内に現存する江戸時代の青銅製狛犬は、元文三年（一七三八）銘の本資料以外には、高津社の宝暦四年（一七五四）銘が知られるだけである。

【考古遺物】

大正六年から同十年にわたって行なわれた国府遺跡発掘調査は、当時の大阪毎日新聞社主本山彦一氏の支援のもとに行なわれ、道明寺天満宮はその発掘調査の本部として宿舎の提供や調査への参加など、物心両面におよんで協力を惜しまなかった。その関係から宝物館には球状耳飾をはじめとした国府遺跡出土品が所蔵されている。またそのほかにも当宮境内などから採集された土器、埴輪や瓦など数百点にもおよぶ遺物が所蔵されている。

67 軒丸瓦

飛鳥～奈良時代 七～八世紀

① 径一八・一

② 径一八・五

③ 半径一〇・〇

④ 径一四・五

⑤ 半径九・五

①、②ともに単弁七葉蓮華文軒丸瓦。②瓦当裏に「大正七年採集 推古朝道明寺初期連舜古瓦 南坊城餘香□」との墨書がある。七つの間弁のうち一つが大きく、これは土師寺跡出土瓦にもみられ、七世紀後半に位置づけられる。③は複弁八葉蓮華文軒丸瓦。「橘寺イヤコ」と墨書があり、奈良県高市郡明日香村にある橘寺の出土品と考えられている。④は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、出土地は不明。⑤は素弁八葉蓮華文軒丸瓦。「法隆寺大正七年五月十六日」と墨書があり、法隆寺出土品と考えられる。

68 ○玦状耳飾 藤井寺市指定文化財

縄文時代前期

右 横径四・七 縦径四・四

左 横径三・五 縦径三・五

大正八年に行なわれた国府遺跡第四次発掘調査で第四号人骨に伴って出土した玦状耳飾。国府遺跡発掘調査を支援していた当時の宮司南坊城良興氏が本山彦一氏からそのお礼として寄贈されたものである。玦状耳飾は中国の玦に似ていることからそう呼ばれるようになった。国府遺跡で頭蓋骨の両側から発見されたことで耳飾であることが初めて明らかとなった。装着方法は耳朶に孔をあけ、切れ目から通して垂下する。縄文時代前期のものと考えられ、同遺跡出土の玦状耳飾は京都大学所蔵分、関西大学所蔵分、表採されたものを含めて計十四点が知られている。

69 石鏃

弥生時代

①器長三・五 器幅二・五 ②器長二・六 器幅二・〇

③器長二・三 器幅一・五 ④器長三・六 器幅一・一

⑤器長三・四 器幅一・二 ⑥器長三・四 器幅一・三

⑦器長四・四 器幅一・八 ⑧器長二・八 器幅一・八

⑨器長三・〇 器幅一・六 ⑩器長二・九 器幅一・三

⑪器長五・六 器幅二・〇 ⑫器長三・六 器幅一・四

⑬器長三・五 器幅一・三 ⑭器長四・〇 器幅一・八

国府遺跡で出土したサヌカイト製の石鏃。台紙の裏面に「国府遺跡採集」との墨書がみられるが、採集された時期、さらに出土状況や共伴遺物の有無などは不明。形状などから弥生時代のものであると考えられる。石鏃は矢の先端に装着する石製の矢じりのことで、漁撈具の銛先としても使用されていた。弓矢の初現は縄文時代の始まりとほぼ同時であると考えられており、石鏃は縄文時代、弥生時代と使用されていた。縄文時代には狩猟用として、弥生時代には武器としても使用されていたとの指摘もある。

70 板碑

室町時代 十五世紀

残存長四四・五 幅二五・一 最大厚二・三

頭部を山形につくる緑泥片岩製の小型板碑。下半部を欠損する。蓮台の上に、月輪の中に阿弥陀如来を表わす梵字「キリーク」を、その右下に聖観音菩薩を表わす梵字「サ」、左下に勢至菩薩を表わす梵字「サク」を配している。偈にあたる部分には「禪」と判読できる文字を確認できるが、下半部を欠損しているため以下のように字句が続くかは不明。応永三十二年（一四二五）の銘がある。藤井寺市に現存する中世の板碑はこの一点のみである。

【石造物】

石造物は灯籠や常夜灯、玉垣、井戸枠など三十点を超す資料が明治末年までに奉納されている。年号が確認できるものも多く、天満宮の歴史を考える上でも重要な資料である。最古の年号が確認できるのは康元二年（一二五七）銘の石灯籠である。

71 石灯籠

安土・桃山時代 十六世紀

(右) 高一九四・〇

(左) 高一九四・〇

本殿の両脇に立てられた一对の灯籠で、文禄四年(一五九五)の銘をもつ。火袋、笠とも四角形である。笠に蕨手はない。火袋は木製で、縦三三・五センチメートル、横三六センチメートル、奥行き四〇センチメートルである。竿の部分には「河内志記郡道明寺文禄二年乙未曆辻左衛門敬白」と銘が彫られている。一对の灯籠は安土桃山時代から一般的になり、この灯籠はその古い事例といえる。天満宮の本殿は天正三年に焼失したと伝えるが、この灯籠は、その復興を示す資料といえるだろう。

72 石灯籠

鎌倉時代 十三世紀

高一七四・七

天寿殿の中庭にある灯籠で、竿の部分に「奉法入/天地院/御宝殿/康元二/年丁巳/正月十/五日造/立畢」と三字ずつ八行にわたる彫銘がある。花崗岩製で、火袋を六角形、竿を円柱状につくる。笠に宝珠を置いているが、請花はない。東大寺の天地院にあった灯籠と伝承されている。慶応二年(一八六六)に、両替商大坂屋大吉により奉納された。

73 石柱

明治時代 二十世紀

高一〇一・〇 幅六〇・五 奥六〇・〇

境内の参道の両脇に立てられている石柱で、明治四十五年五月の年号をもつ藤澤南岳の書が刻まれている。南岳は道真を尊崇しており、また当時の宮司南坊城良興が泊園書院の塾生であったこともあって、道明寺天満宮に建築した大成殿に泊園書院の孔子像を移して、明治三十六年三月三十日に初めて釋奠を行なった。

(右表) 「神化肅雍百世仰敬」

(右裏) 「藤澤南岳書」

(左表) 「玄德明美萬邦 致尊親」

(左裏) 「明治四十五年壬子夏五月大阪敬神組献之」

74 石製井戸枠

江戸時代 十七世紀

幅一〇七・〇 高五七・〇 奥一〇五・〇

境内に入って本殿に向かう参道脇にある石製の井戸枠で、その彫り銘から延宝五年(一六七七)八月二十五日に「辻子又右衛門尉□□」から寄進されたことがわかる。辻子又右衛門とは、当時年貢の取立てなどを担当したと思われる寺役人である。同年七月に又右衛門の母からも灯籠が寄進されている。

75 玉垣

江戸時代 十八世紀

門扉 幅二六八・三 高一四〇・〇

本殿の裏手に、門と二枚の大型の石扉を挟んでめぐらされた玉垣。石扉の上部には梅鉢の透かし彫り、下部は格子の透かし彫りがある。道明寺天満宮に残されている史料から、寛延二年(一七四九)、鴻池善右衛門が取次となって、崇敬者から奉納されたことがわかる。善右衛門とは、当時の鴻池家の五代当主である宗益にあたる。

【絵馬】

道明寺天満宮には近世に建築された絵馬堂が残っており、そこに約二十点の絵馬が掛けられている。伝存している絵馬の画題は芝居絵や猿曳、天神図などが確認できる。とくに明治四十二年に奉納された消防演習図絵馬(76)は珍しく、歴史資料としても貴重である。現在絵馬堂にはアルミサッシの建具が入っているが、長年風雨が直接吹き込んでいたため、惜しいことに多くの絵馬は剥落が著しい。

76 消防演習図絵馬

明治時代 二十世紀

縦一〇〇・五 横一九九・五

明治四十二年（一九〇九）、八尾町（現八尾市）の消防組が奉納したもので、消防演習の様子を描いた珍しい絵馬。天満宮をイメージする梅の木の横に整列した三十数名の組員と組長、演習を見守る巡查三名が描かれている。組員は制服を着用しているが、ポンプは人力で引く手動式ポンプ。当時、大阪市ではすでに蒸気ポンプが採用されており、近代化される直前の消防制度を伝える貴重な歴史資料といえよう。

77 騎牛吹笛図絵馬 森魯堂筆

江戸時代 十九世紀

縦一八七・四 横一三六・二

額に墨書があり、それによれば弘化二年（一八四五）に松寿院が取次になって、富田林の信者から奉納された絵馬であることがわかる。天神の使いである牛に乗って笛を吹く牧童が画題になっており、牧童は中国風の描写である。絵師は森魯堂。この絵馬は現在宝物館にあるが、以前は絵馬堂に掛けられていたため、その名残の千社札四枚が貼られたままになっている。

78 猿曳図絵馬 吉村周南筆

江戸時代 十九世紀

高一五一・一 幅九〇・七

享和二年（一八〇二）、上方の歌舞伎役者二世嵐吉三郎が願主となって奉納された絵馬。当時、吉三郎は「猿曳門出諷」で大当たりをとり、それを記念して舞台の姿を描かせたもので、絵師は大坂画壇で活躍した吉村周南。人物や猿の表情が生き生きと描かれている。

【名木】

79 楠

クスノキ科ニッケイ属の常緑高木。樹齢は約三〇〇〜五〇〇年と推定される。

大成殿の左手に神木として祀られている。

80 ○木榎樹 大阪府指定天然記念物

中国原産のムクロジ科の落葉高木で、六月頃に黄色い花を咲かせ、八月末ごろに長楕円形の黒い実をつける。道明寺天満宮西宮にあり、現在の木榎樹は数代目。菅原道真が元慶八年（八八四）に書写した大乘経を埋納した経塚から生えてきたといわれているこの木は、謡曲「道明寺」にも登場し、「この木の実を百八個集め、数珠を作って念仏を百万遍唱えると必ず極楽往生できる」と謡われている。

【釋奠】

明治三十六年（一九〇三）に藤澤南岳らによつてはじめられた道明寺天満宮の釋奠は、現在も釋奠会によつて執り行なわれており、開催回数は百回を超えている。文字の意味から言えば、「釋」も「奠」も供え物を並べるという意味である。それが、後漢時代に光武帝が孔子とその弟子を祀ったことから、孔子を祀ることをいうようになった。

81・82 大成殿・大成殿完成予想図

明治時代 二十世紀

大成殿は帝室技芸員九代目伊藤平左衛門によつて設計され、明治三十五年に建てられた、孔子を祀るための廟である。重厚な外扉を開くと、朱と黄色に塗られた内扉が現われ、中国的な印象を強く受ける。現存している完成予想図は伊藤平左衛門によつて書かれたものであり、当初の計画では石垣や門が造られる予定であったことがわかる。

83 対聯

明治時代 二十世紀

縦一〇六・一 横九・七

大成殿の正面左右に掛けられている木製の対聯。藤澤南岳の染筆といわれ、儒

教の教えを端的に述べた対句が、行書で浅く彫り込まれている。ゆつたりと丁寧
に書かれた書風は、南岳の人柄を偲はせる。釈文は左記の通り。

右 道賛化育範垂於百王 道は化育を賛け、範は百王に垂る
左 惠配乾坤教施于萬國 惠(徳)は乾坤に配し、教えは万国に施す

- ⑥ 宮司玉串を奉りて拝礼
- ⑦ 参列者玉串を奉りて拝礼
- ⑧ 饌を撤す
- ⑨ 宮司以下祭員退出

84 孔子像

像高二八・八

木製の立像で、おのたかなら小野篁作と伝えられている。かつて足利学校に祀られていたが、
その後所在不明となり、近世になって高松藩に渡ったとされる。高松藩士であつた藤澤南岳がこれを譲り受け、明治六年に泊園書院に奉祀した。明治三十五年の大成殿落成の際に奉納され、現在にいたるまで釋奠の際にはこの孔子像が祭壇の中央に置かれる。

85 媽祖像

像高十四・二

木製の坐像で、奉納された当初から孔子像、もしくは孔門十哲の主座と目されている顔回像がんかひがと考えられていたが、近年媽祖像まそであることが判明した。媽祖は天妃てんひがともいわれる航海守護の女神で、十世紀頃、宋時代の中国福建省で興った土俗的信仰であつたが、明時代の貿易発展とともに東アジアに広まったといわれる。琉球国でも、那覇や久米島などに天妃宮が建立されており、オナリ神信仰との習合がみられる。

86・87 釋奠祭・釋奠祭 祭壇

釋奠祭は左記のような次第で進行する。

- ① 修祓
- ② 宮司一拝
- ③ 饌を供する
- ④ 祝詞奏上
- ⑤ 祭文奏上

道明寺天満宮略年表

和 暦	西 暦	出 来 事
垂仁天皇三十二年 敏達天皇頃		野見宿禰に「土師」姓を賜る 土師神社創建される
推古天皇二年 神護景雲三年	五九四 七六九	土師八嶋が自宅を喜捨して土師寺を創建する 若江郡稲葉・菱江が寺領となる
天安二年三月二十二日 元慶四年四月	八五八 八八〇	河内国天夷鳥神 <small>(あめのひなりのかみ)</small> (現元宮土師社御祭神)に従五位下が授けられる 道真公が土師寺にて「十一面観音菩薩立像」(現道明寺御本尊)を彫る
元慶八年四月 昌泰元年十月二十八日	八八四 八九八	道真公が五部の大乘経を書写し、埋納する 道真公が宇多上皇の御伴をされ土師寺に立ち寄る
昌泰四年二月三日 延喜三年二月二十五日	九〇一 九〇三	道真公が九州への左遷の途次、叔母の覚寿尼公を土師寺に訪ねる 道真公が大宰府にて薨去される
天曆元年 治安三年十月二十七日	九四七 一〇二三	土師神社に天満宮を創建し、土師寺を道明寺と改称する 藤原道長が道明寺に参拝する
寛元四年十月二十五日 永仁六年四月十日	一二四六 一二九八	興正菩薩叡尊が道明寺で尼二百三十六人に菩薩戒を授ける 鎌倉幕府祈禱所となる
延慶三年 天正三年四月	一三一〇 一五七五	西琳寺の住僧鑊阿に託宣があり、「八葉御鏡」が勅封となる 古市高屋城兵乱により焼亡する
天正七年二月二十五日 文祿三年十二月二日	一五七九 一五九四	『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』成る 豊臣秀吉より百七十四石二斗の朱印をいただく
正徳六年六月二十日 享保十二年五月	一七一一 一七二七	石川の堤が切れ堂社等破壊される 御神宝が靈元法皇と中御門天皇の叡覧に浴す
享保十五年 延享二年一月十七日	一七三〇 一七四五	堂社等が北丘へ引き上げられる 社殿が複合社殿(権現造)へと改築される
明治五年六月 明治十年二月十二日	一八七二 一八七七	神仏分界により土師神社と改称する 明治天皇大和巡幸の際、行在所となる
明治三十五年四月 昭和二十七年二月十一日	一九〇二 一九五二	菅原道真公千年大祭が斎行される 土師神社を道明寺天満宮と改称する
平成十四年二月二十五日	二〇〇二	菅原道真公千百年大祭が斎行される

*年表は道明寺天満宮禰宜南坊城光興氏による

協力機関

藤井寺市教育委員会文化財保護課
藤井寺市立図書館
大阪歴史博物館
道明寺天満宮

解説担当者

高橋 隆博（関西大学文学部教授、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

図版番号 1～6、8～11、48～50、52、56～61、

千葉 太郎（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター リサーチ・アシスタント）

図版番号 65、67～70

長谷 洋一（関西大学文学部教授、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）

図版番号 16～17、19～31、41～43

原田 正俊（関西大学文学部教授、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）

図版番号 12～15、18、32～40

南坊城光興（道明寺天満宮禰宜）

図版番号 7、44～47

宮元 正博（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター リサーチ・アシスタント）

図版番号 79～87

森 隆男（関西大学文学部教授、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）

図版番号 51、64、71～78

吉田 晶子（財団法人枚方市文化財研究調査会学芸職員、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）

図版番号 62～63、66

*なお、刀剣類（図版番号 53～55）の解説については千田康治氏（高槻市立しろあと歴史館学芸員）に執筆していただいた。

文部科学省私立大学学術高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成17年度～平成21年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

なにわ・大阪文化遺産学叢書 4

道明寺天満宮宝物選

平成19年 3月31日 発行

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学博物館内

なにわ・大阪文化遺産学研究センター

TEL ; 06-6368-0095

mail ; naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所 株式会社 NPC コーポレーション

〒530-0043 大阪市北区天満 1-9-19